

第6回（平成21年度）

教育システム改善のためのアンケート調査報告書

平成21年9月

有明工業高等専門学校

学校運営検討委員会

目次

1. まえがき	1
2. アンケートの結果と分析	3
2.1 5年生卒業時アンケート	3
2.2 専攻科生修了時アンケート	19
2.3 新入生保護者アンケート	28
2.4 2年生保護者アンケート	33
2.5 4年次編入生アンケート	38
3. あとがき	41

1. はじめに

本校では、教育理念に基づいて設定された学習・教育目標を達成できるように教育プログラムを作成し、日々の教育活動を行っています。この教育プログラムに沿って教育を行っているという本校の教育システム（教育体制）は、常に点検・評価を行い、その結果を検討・分析し、改善を継続的に行い、向上させて行く必要があります。学校運営検討委員会（以下、本委員会）は、本校の教育システムの改善の一環として、学内外においてアンケートを実施してきました。アンケートの対象者は、学内では卒業直前の本科5年生・修了直前の専攻科2年生・4年次編入生、学外ではOB（卒業生）・企業・新入生の保護者・2年生の保護者です。そして、下の表にあるように、このアンケートの結果を集計・分析・評価・公開し、改善点等を指摘した「教育システム改善のための調査報告書」（以下、調査報告書）として報告し、教育システムの向上の一端を担ってきました。とくに、第5回は、過去6年間の総括分析を行いました。

分析回	調査年度	実施時期	アンケート対象	作業状況	報告年月	備考
第1回	H14年度	2003年2月 2003年1月	H14年度本科卒業生 H14年度専攻科修了生	分析完了 報告書公開	H16年3月	JABEE 作業部会
	H15年度	2003年7月 2003年11月	OB 主な就職先企業			
第2回	H15年度	2004年2月 2004年1月	H15年度本科卒業生 H15年度専攻科修了生	分析完了 報告書公開	H17年6月	JABEE 作業部会
	H16年度	2004年6.9月	OB			
第3回	H16年度	2005年2月 2005年2月	H16年度本科卒業生 H16年度専攻科修了生	分析完了 報告書公開	H19年6月	学校運営 検討委員会
	H17年度	2005年12月 2005年12月	OB 主な就職先企業			
第4回	H17年度	2006年2月 2006年1月	H17年度本科卒業生 H17年度専攻科修了生	分析完了 報告書公開	H19年7月	学校運営 検討委員会
	H18年度	2006年4月 2006年7月	新入生保護者 2年生保護者			
第5回	H18年度	2007年2月 2007年1月	H18年度本科卒業生 H18年度専攻科修了生	分析完了 報告書公開	H20年6月 (H20年9月)	学校運営 検討委員会
		2007年4月 2007年4月 2007年8月 2007年12月	新入生保護者 編入生 2年生保護者 OB			
	H19年度	2007年12月 2008年2月 2008年2月 2008年3月	主な就職先企業 H19年度本科卒業生 H19年度専攻科修了生 新入生保護者			
		H20年度	2008年4月 (2008年9月)			
第6回	H20年度	2009年2月 2009年2月 2009年3月	H20年度本科卒業生 H20年度専攻科修了生 新入生保護者	分析完了 報告書公開 予定	H21年9月	学校運営 検討委員会
		H21年度	2009年4月 2009年9月			

今回の調査報告書は、平成20年度の卒業直前の本科5年生・修了直前の専攻科2年生・平成21年度新入生および2年生の保護者・平成21年度4年次編入生を対象に行ったアンケートを集計し、過去の結果と比較して分析を行ったものです。上記アンケート対象者による今回の評価結果に関しては、全体としては、本校の教育システム

はおおむね良好な状態であると言えます。前回までの分析と比較して特筆すべきことは、5年生・修了生による評価が、電子情報工学科で高くなっている一方、物質工学科および建築学科で低くなっていることです。

細かく見ると、改善が進んでいる事項もあれば、数年間に渡り改善が進まない事項もあります。本調査報告書の意義は、前述したように、本校の教育システムの改善を促すことです。依然として改善が見られない事項に関しては、関係の教員・組織は、そのことを認識して改善に取り組む必要があると思われます。本調査報告書が本校の向上に資することを切望する次第です。

2. アンケートの結果と分析

2.1 5年生卒業時アンケート

現在までに実施した5年生卒業時アンケートの実施時期、回答者数等は下の通りであり、今回の分析は、平成20年度卒業生分を、過去6回あるいは前年度と比較しながら分析した。

個々の項目に関する分析の詳細は後述の通りであるが、今回の分析における全体的な傾向は、電子情報工学科で、まだ良好な状態までは届いていないが、評価が上昇していること、逆に、建築学科で評価が減少した項目がかなり見受けられることである。

	実施時期	対象者数	回答者数	回答率
平成14年度卒業生	2003年2月	177名	161名	91%
平成15年度卒業生	2004年2月	165名	160名	97%
平成16年度卒業生	2005年2月	190名	180名	95%
平成17年度卒業生	2006年2月	186名	178名	96%
平成18年度卒業生	2007年2月	192名	178名	93%
平成19年度卒業生	2008年2月	167名	163名	98%
平成20年度卒業生	2009年2月	171名	168名	98%

以下の分析記述において、たとえば、[必要性]の設問では、回答の選択肢は『必要』『少し必要』『あまり必要でない』『必要でない』の4つがあるが、この4つの回答合計数の中で肯定的な『必要』『少し必要』の回答数のパーセンテージを『必要度』と定義している。同様に、[教育実状]の選択肢『適正』『おおむね適正』『やや不適正』『不適正』の回答合計数に対する『適正』『おおむね適正』のパーセンテージを『適正度』と定義している。[満足度]、[到達度]に関する設問での『満足度』、『到達度』も同様である。また、それぞれの『〇〇度』について、2年間で見ると、前年度から増加したパーセンテージを「何ポイントの増加」というように表している。さらに、複数年間（多くの場合、6年間）でのパーセンテージの増加平均を増加率と表記しており、たとえば、6年間の増加率が1ならば、6年間トータルでは5ポイントの増加と見なしている。

【A：回答者自身に関する設問】について

平成14年から平成20年の7年間で、回答者数は全体で1188名であり、単年平均では170名である。平成20年度の回答者は、建築学科が41名、他の4学科は30名前後である。上記の表で対象者数を見て分かるように、平成16～18年度19名前後であった卒業生が、平成19・20年度は170名前後になっている。一因として、留年者の増加が考えられ、現在本校が取り組んでいる留年者数の減少は重要な課題であることを示唆している。

卒業後の進路については、前年度までどの学科でもほぼ50以上の学生が『就職』と回答していたが、今回、電子情報工学科で『その他』が7名(21%)おり、『就職』は13名(39%)であることが特筆すべきことである。『就職』や『大学進学』、『専攻科進学』の割合については、前回までと同様、全体として、ほぼ横ばいである。また、進学の内訳としては『大学進学』の割合は減少し、『専攻科進学』の割合が増加傾向で、平成18・19年度の専攻科進学者の絶対数は専攻科定員の約2倍、今回は1.5倍に達している。

【B：教育全般の総括に関する設問】について

本校の一般教育の『満足度』は、平成14年度以降5学科平均で60%以上、平成19年度では74%以上、今回は83%であり、格段に上昇している。前回の分析で唯一減少傾向であった機械工学科も、平成19年度の59%から75%と増加している。

専門教育の『満足度』については、平成14年度の56%から平成19年度の84%へと増加、今回も85%である。学科別に見ると、前回の分析で、電子情報工学科以外の4学科が90%であるのに対し、6回平均で47%であった電子情報工学科も、今回は74%と増加している。しかし、他の4学科は今回90%前後であり、電子情報工学科のもう少しの上昇を期待する。

教育設備の『満足度』は、前回までの平均で71%と比較的高く、平成19年度では76%、今回も74%と高い状態を維持している。前回の分析で、他学科と比較して6年平均で62%と若干低かった電子情報工学科は今回も65%と若干低い。特筆すべきは、平成19年度に80%まで上昇していた建築学科が、今回57%と激減している。原因を調査する必要があると思われる。

勉強以外の学生生活の『満足度』は、6年間の全学科平均で74%、平成19年度で79%、今回83%と高い結果を維持している。学科別に見ると、平成19年度88%と特に高かった電気工学科が今回70%と減少し、逆に、平成19年度70%であった機械工学科が93%となっている。年度によるクラスの雰囲気等が影響しているのかもしれない。

今回のアンケートから新しく設問した「5年間で自分自身に実力がついたと思いますか」に対する『到達度』については、平均で74%が『身に付いた』『おおむね身に付いた』と回答している。ただし学科別に見ると、機械工学科の90%に対し、電気工学科及び電子情報工学科では60%前後である。学生自身の自己評価ではあるが、今後、この数値が上昇することを期待する。

一般教育・専門教育・教育設備・学生生活・到達度等、本校の教育全般に関する結果としては、全体として良好な結果が得られていると思われる。

【C：科目教育に関する設問】について

●一般科目

○国語

前回まで84%～89%で推移していた[必要性]の『必要度』は、今回89%であり、[教育実状]の『適正度』は前回までが76%～81%、今回80%であり、横這い状態である。しかし、『到達度』は前回までの52%～62%から今回67%と増加している。引き続き、向上を期待したい。

○社会

『必要度』は前4回70%～74%で推移していたものが平成19年度86%まで10ポイント以上上昇し、今回も82%と高い水準を維持している。[教育実状]の『適正度』は平成16年度以降65%～68%から年々上昇し平成19年度は72%、今回77%まで達している。『到達度』も平成16年度以降42%～50%から平成19年度54%、今回55%である。ここ数年間の上昇は評価できるが、[到達度]の向上にまだまだ改善を要する。

○英語

『必要度』は今回も含めて過去7年間とも90%以上であり、学生はその必要性を高く認識している。しかし、[教育実状]の『適正度』は平成18年度の66%を除いて46%～60%であり、今回も58%である。『到達度』も平成18年度の48%を除いて33%～42%で推移しており、今回も44%である。前回の分析同様、[教育実状]および[到達度]の向上のための強力な改善を行う必要がある。

○化学・生物

『必要度』は平成17年度から66, 72, 73%と上昇し、今回80%である。学科別では、物質工学科では100%, 前回まで低かった建築学科も79%である。代わりに電子情報工学科は今回61%である。[教育実状]の『適正度』は、平成18, 19年度が70, 82%と上昇したが今回76%と減少した。『到達度』は平成17年度以降60, 60, 61%とほとんど変化がなかったものが今回55%と減少している。年々上昇傾向だった[教育実状]の『適正度』および『到達度』が再び上昇されることを期待する。

○体育

『必要度』は、前回までの81～90%と同様、今回88%である。[教育実状]の『適正度』は、平成15年度以降68～76%から徐々に上昇し前回77%だったが、今回71%と減少した。『到達度』は、前回までの64～74%と同様、今回68%である。過去7年間、ほぼ横這いの状況である。

○美術・音楽

48～60%で推移していた『必要度』は、今回も57%である。[教育実状]の『適正度』は、63～70%の推移から今回64%である。43%から年々上昇し前回55%に達した『到達度』は、今回50%と減少した。前回までと同様、絶対的に低い値である。前回の指摘同様、情操教育の重要性の啓発が必要と思われる。

○2年次までの数学

『必要度』は、平成18年度の92%, 今回の93%を除いて95%を超えている。[教育実状]の『適正度』も90%前後で推移し、今回も90%である。79～86%で推移していた『到達度』は、今回81%である。良好な状態といえる。継続して行くことを期待する。

○2年次までの物理

前回まで90%前後で推移していた『必要度』は、今回も95%であり、80%前後であった[教育実状]の『適正度』は、今回86%であり、平成17年度以降63, 68, 73%であった『到達度』は、今回67%である。ほぼ横這いの状態であり、[教育実状]と『到達度』に更なる向上を期待したい。

低学年における一般教科目全体としては、ほぼ前回までと同様の結果である。低学年で受けた授業を5年生の卒業時に評価しているのので、改善の効果が現れるのにタイムラグはあるかもしれないが、とくに、英語、美術・音楽の授業に関しては、依然として芳しくない評価結果が得られていることを念頭に置いておく必要がある。

●全学科共通専門科目

○低学年次の情報処理基礎

[必要性]の『必要度』は平成16年度までは82%を超えていたが、その後75, 70, 80%と推移し、今回88%である。[教育実状]の『適正度』は、電子情報工学科は全6回とも76%以上、今回85%であるが、他の学科は依然として低い。ただし、今回、電気・物質・建築学科は65%・74%・68%と前回までよりは増加しているものの、機械工学科は31%と極端に低い。『到達度』も、電子情報工学科と物質工学科は今回73%と71%であるが、電気工学科と建築学科は60%前後であり、特に機械工学科は38%である。電子情報工学科は良好といえるが、他の学科とくに機械工学科は劣悪な状況である。一般教育科で担当している1年次の情報処理基礎については、強力な改善が必要であると毎回指摘しているが、一向に改善の結果が見られない。

○低学年次の工学基礎Ⅰ, Ⅲ

この科目を履修した卒業生は平成16年度以降の4年間の卒業生である。『必要度』は、全体として68, 77, 77, 84%と上昇し、今回85%である。[教育実状]の『適正度』も、72, 80, 80, 84%と上昇し、今回83%である。『到達度』も、53, 65, 71, 69%と上昇し、今回67%である。増加から横這いへの状態に収束した感がある。『到達度』の更なる上昇が望まれる。

○3年次以上の応用数学

『必要度』は、6年間とも84%を超えており、平成19年度は95%、今回94%である。[教育実状]の『適正度』は、平成15年度以降78%から徐々に上昇し平成19年度は90%、今回も90%である。『到達度』も、60%弱から平成19年度の76%まで上昇し、今回も75%である。前回同様、評価できる状況であるが、[到達度]がもう少し向上することを期待する。

○3年次以上の応用物理

『必要度』は、平成17年度以降72, 80, 88%と上昇し、今回90%である。[教育実状]の『適正度』も、67, 79, 80%と推移し、今回82%である。『到達度』は、55, 62, 65%と推移し、今回60%である。前回同様、[到達度]の引き上げが必要と思われる。

○卒業研究

『必要度』は6年間とも85%以上、今回96%である。[教育実状]の『適正度』は、前回まで80%前後、今回86%であり、前回まで平成17年度以降60～70%の間であった電子情報工学科も今回76%と上昇している。平成17年度以降、78, 79, 82%と推移していた『到達度』は、今回も82%である。良好な状態であり、電子情報工学科の[教育実状]の上昇は評価できる結果である。

○授業外科目（学外実習，課題研究）

この科目に関する設問は平成18年度からである。3年間について、『必要度』は90%弱、『到達度』は80%前後である。良好な状態であり、今後とも継続して行くことを期待する。

●専門科目

◎機械工学科対象

○工学基礎系科目

『必要度』は90%以上で非常に高い。[教育実状]の『適正度』も95%以上と非常に高い。『到達度』についても90%を示していることから、非常に良好であることがわかる。

次に、過去6年間と比較すると、過去6年間の『適正度』と『到達度』の平均値が90%と83%であったことから、『適正度』は5ポイント増加し、『到達度』はほぼ変わらず高い値を維持している。

○構造系科目

『必要度』は97%と非常に高い。ここで、『必要と思う』の割合が70%を超えている所が特筆すべき点である。[教育実状]の『適正度』も97%と非常に高い。『到達度』についてはおよそ90%と高い。

また、過去6年間と比較すると、過去6年間の『必要性』、『適正度』、『到達度』の平均値はそれぞれ97%、92%、85%であったことから、全てにおいて過去6年間と変わりなく高い値を維持していることがわかる。

○加工系科目

『必要度』は90%と高い。[教育実状]の『適正度』についてもおよそ85%と高い。『到達度』については70%以上ではあるものの、『必要度』や『適正度』ほど高くはない。

また、これは過去6年間と比較して同様の傾向であり、科目独自の問題かもしれないが、『必要度』と『適正度』は非常に高いので他の専門科目系との情報交換を活発にすることで、『到達度』のさらなる改善が見込める。

○エネルギー系科目

『必要度』はおよそ85%と高い。[教育実状]の『適正度』もおよそ85%と高い。『到達度』は80%と比較的高い。

また、過去6年間と比較すると、過去6年間の『必要度』、『適正度』、『到達度』はそれぞれ95%、86%、76%であり、『必要度』が10ポイント低下しているものの、全てにおいて過去6年間と変わりなく高い値を維持していることがわかる。

○制御系科目

『必要度』は85%以上と高い。[教育実状]の『適正度』も85%以上と高い。『到達度』については75%を超えている。

また、過去6年間と比較すると、『必要度』については平成19年度の71%よりは14ポイント高くなっているものの、過去6年間の平均値88%と比べるとほぼ同様であり、高い値を維持している。『適正度』については過去6年間の平均値は88%であり、ほぼ同様に高い値を維持している。『到達度』については、平成19年度の62%と比べると13ポイント改善されている。

○総合系科目

『必要度』はおおよそ95%以上と非常に高い。[教育実状]の『適正度』も90%以上と高い。『到達度』はおおよそ90%と高い。

また、過去6年間と比較すると、『必要度』、『適正度』、『到達度』の過去6年間の平均値はそれぞれ93%、89%、78%であり、全てにおいて過去6年間と変わりなく高い値を維持しており、特に『到達度』は12ポイント増加している。

○機械工学科専門科目計

『必要度』はおおよそ85%以上と高い。[教育実状]の『適正度』は85%以上である。『到達度』についてはおおよそ75%と比較的高い。

また、過去6年間と比較すると、『必要度』、『適正度』、『到達度』の過去6年間の平均値はそれぞれ93%、89%、78%であり、全て若干ではあるが減少傾向であるものの、機械工学科専門科目は全体的にみて、おおむね良好であると考えられる。『適正度』と『到達度』の評価が高いこの状況を今後も継続していくことを期待する。ただし、若干低下している傾向が見られるので、各科目で特に『必要度』を上げるための工夫をお願いしたい。

◎電気工学科対象

○電気電子基礎科目

『必要度』は91%以上となっており、ここ数年間の結果同様、ほとんどの学生が必要性を感じている。『適正度』は85%でほとんどの学生が適正であるとしている。『到達度』は79%である。電気電子基礎科目は、おおむね良好であるといえる。しかしながら、過去3年間の『到達度』85, 89, 88%に対して、今回の『到達度』に6～10ポイントの減少がみられる点には留意する必要がある。

○情報工学系

『必要度』は94%となっており、ここ数年間の結果同様、ほとんどの学生が必要性を感じている。『適正度』は過去3年間で87, 81, 76%と5～6ポイントずつ継続して減少してきたのに対して、今回88%と平成19年度から12ポイントの増加がみられる。『到達度』は平成19年度の64%から今回70%と6ポイントの増加がみられる。情報工学系はおおむね良好であるといえ、昨年度まで減少傾向であった『適正度』、『到達度』ともに今回改善がみられる点は評価できる。

○電力工学系

『必要度』は94%となっており、ここ数年間の結果同様、ほとんどの学生が必要性感じている。『適正度』は88%で、ほとんどの学生が適正であるとしている。『到達度』は79%である。電力工学系は、おおむね良好であるといえる。しかしながら、過去3年間の『到達度』90, 87, 91%に対して、今回の『到達度』に8～12ポイントの減少がみられる点には留意する必要がある。

○電子工学系

『必要度』は91%となっており、ここ数年間の結果同様、ほとんどの学生が必要性感じている。『適正度』は85%となっており、ほとんどの学生が適正であるとしている。『到達度』は平成19年度と同じ73%で横這いとなっている。電子工学系は、おおむね良好であるといえる。

○電気電子共通

『必要度』は94%となっており、ほとんどの学生が必要性感じている。『適正度』は97%と非常に高い値となっており、ほとんどの学生が適正であるとしている。『到達度』は平成19年度の66%に対して今回75%と9ポイントの増加がみられる。電気電子共通は、おおむね良好であるといえる。

○電気工学科専門科目計

『必要度』の平均はここ数年間90%以上であり、今回も93%と従来通り高い値である。系毎にみてもすべての系で90%以上であり、ほとんどの学生が現在開講されている専門科目に対する必要性感じている。『適正度』の平均は89%で、過去3年間の88, 90, 88%とほぼ変わらない高い値で横ばいとなっている。系毎にみてもすべての系で85%以上である。ほとんどの学生が、現在開講されている電気工学科の専門科目が適正であるとしている。『到達度』の平均は75%で、平成19年度の76%とほとんど変わらず横這いの状態である。平成20年度のそれぞれの系の『到達度』は70%～79%とそれほど差はみられないが、平成19年度からの増減をみると、情報工学系や電気電子共通のように『到達度』が増加した系と電気電子基礎科目や電力工学系のように『到達度』が減少した系があり、その結果、この2年間の『到達度』が横這いとなったことが分かる。

電気工学科専門科目は全体的にみて、おおむね良好であるといえる。『必要度』と『適正度』は各数値や傾向のいずれにも問題はみられない。一方『到達度』に関しては、数値自体はそれほど低いわけではないが、前年と比べて値が増加した系と減少した系がみられた。増加した系はさらに高い『到達度』となるように引き続き努力してもらいたい。減少した系はその原因を調査し、対策を講じる必要がある。

◎電子情報工学科対象

○電子情報基礎

[必要性]について、『必要度』は91%であり、平成14年度から平成19年度までの6年間の平均93%と同程度である。[教育実状]の『適正度』は94%であり、6年間の平均84%と比べて高くなっている。一方、『到達度』は70%であり、6年間の平均76%と比べて若干低くなっている。

○電子工学系

『必要度』は94%であり、6年間の平均77%と比べて大幅に高くなっている。『適正度』は76%であり、6年間の平均56%と比べて大きく増加している。『到達度』は59%であり、この数値も6年間の平均47%と比べて増加している。

○情報工学系

『必要度』は94%であり、6年間の平均93%と同程度である。『適正度』は76%であり、6年間の平均81%と比べて少し減少している。『到達度』は76%であり、6年間の平均76%と同じとなった。

○総合領域

『必要度』は91%であり、平成16年度から平成19年度までの4年間の平均87%から少し増加している。『適正度』は91%であり、4年間の平均71%から大幅に増加している。さらに『到達度』は82%であり、4年間の平均63%から大きく向上している。

○情報工学系の演習

『必要度』は94%であり、4年間の平均93%と同程度である。『適正度』は76%であり、4年間の平均86%から減少している。また、『到達度』は76%であり、4年間の平均84%から減少している。

○電子工学系の実験

『必要度』は84%であり、4年間の平均81%とほぼ同じ程度である。一方、『適正度』は84%であり、4年間の平均68%から増加している。さらに、『到達度』は68%であり、4年間の平均53%から増加している。

○電子情報工学科専門科目計

『必要度』は92%であり、6年間の平均86%から増加している。『適正度』は83%であり、6年間の平均72%から向上している。また、『到達度』は72%であり、6年間の平均63%から増加している。

電子情報工学科の専門科目については『必要度』『適正度』『到達度』ともに向上した。特に、電子工学系、総合領域、電子工学系の実験における[教育現状]の『適正度』が大きく増加し、それに伴うかたちで『到達度』も向上している。これは、ここ数年課題とされてきた継続した改善の効果が表れているものとも考えられ、そうであれば喜ばしい。しかし、一方で、年度による学生の興味、気質等の違いによる一過性の可能性もあるので、来年度以降の数値に注目していく必要がある。

◎物質工学科対象

○基礎的な化学（共通科目）

[必要性]では、『必要度』が100%であり、必要性を強く認識しており、ここ数年と同様高く維持されている。[教育実状]はこれまで『適正度』が、年を追うにつれ、74、74、79、88、89、94%（増加率4.4）と増加していたが、今年度は100%となっており、改善されている。『到達度』は87%であり、平成17年度以降85%以上を維持しており、良好といえる。

○基礎的な生物（共通科目）

[必要性]では、『必要度』が94%であり、必要性を強く認識しており、過去6年間と比較しても最も高かった。[教育実状]についても84%と高く、ここ6年間と同様である。『到達度』については、平成16年度以降、74、73、79%と比較的高い割合で推移し、平成19年度には再び59%に落ち込んでいたが、平成20年度も61%と低く、改善を要する。

○基礎的な工学基礎（共通科目）

[必要性]では、『必要度』が100%と非常に高く、過去6年間の77～90%（平均78%）と比較して最も高く、必要性を強く認識している。[教育実状]については、科目群内の科目の変更のあった平成16年度以降、『適正度』は79、62、64%へ減少したものの、平成19年度は82%に戻っており、平成20年度では94%とさらに向上した。[到達度]については、これまでは60～70%（平均65%）と若干低い値で推移していたが、平成20年度は81%と向上しており、良好である。

○専門展開科目（共通選択科目）

[必要性]では、『必要度』が過去6年間は平均88%と高く、平成20年度も94%と非常に高くなっており、必要性を強く認識している。[教育実状]については、平成14年度の74%から徐々に増加しており、平成20年度には97%に達しており、良好である。[到達度]については、平成16年度の82%から若干の減少傾向が見られていたが、平成20年度は87%まで回復しており良好となっている。

○物質コース専門科目

[必要性]では、『必要度』が89%と高く、ここ数年と同様高い値を維持しており、総じて必要性を認識しているようである。[教育実状]については、『適正度』は平成17年度の65%から年々増加傾向を示しており、平成20年度には100%に回復した。[到達度]についても、これまで80%後半という高い値を示していたが、平成20年度も95%と高い値を示している。

○生物コース専門科目

[必要性]では、『必要度』が過去6年のどの年度でも86%以上で平成20年度には100%の高い割合を示し必要性を強く認識しているようである。[教育実状]については、『適正度』がほぼ80%前後(平均83%)の高い値を推移しており、平成20年度には92%とさらに良好となり、問題は見られない。[到達度]は、平成14年度の53%から平成19年度の81%へ徐々に増加していたが、平成20年度は62%に減少しており注意が必要である。

○実験

[必要性]では、『必要度』は過去6年の平均が平均92%であるのと同様、平成20年度も100%と高く、その中でも『必要』の割合が86%と高くなっており、必要性を強く認識しているようである。[教育実状]についても、『適正度』はこれまで80%以上の高い値を推移していたが、平成20年度も93%と高く、問題は見られない。[到達度]も、平成15年以降73%から91%の比較的高い値を推移していたが、平成20年度も81%と高い。

○物質工学科専門科目計

[必要性]、[教育実状]については、ここ6年間の平均で『必要度』、『適正度』はそれぞれ88%、80%に達していたが、平成20年度も97%、94%と高く、良好であるといえる。『到達度』については、平成14年度から平成19年度にかけて57%から76%へ増加し、平成20年度は80%とさらに4ポイントの増加を示しており、年度を追う毎に徐々に改善されているようである。

総じて、物質工学科については、いずれの科目においても比較的高い評価がなされ、また改善している傾向がみられており、特に問題はないと思われる。

◎建築学科対象

○建築学基礎

[必要性]の『必要度』は100%で、過去6年間の平均でも91%の高い数値を示しており、必要性が高く認識されている傾向は続いている。[教育実状]の『適正度』は89%で、過去6年間の平均値86%と同様な数値を示しており、適正であると認識されている。『到達度』は、『必要度』と『適正度』に比べ、65%という低い数値である。過去6年間の『適正度』の値は、平成14～17年度が65～82%であったが、平成18・19年度は83・85%に上がっていた。今回、平成18・19年度の85%前後よりも20ポイントも減少している。『到達度』の数値の推移からこれまで改善が行われてきたと判断していたので今回の著しい減少に至った要因を把握しなければならない。

○計画系1

『必要度』は95%の高い数値であり、過去6年間の平均値83%よりも高く、必要性は高く認識されている。[教育実状]の『適正度』は83%で、これまでの数値は、平成14～平成18年度が63～82%、平成19年度には90%を超えていた。今回は、平成19年度より若干低くなったものの高い値を保っており、改善が継続されている。『到

『到達度』の56%という値は、これまでの平成14～18年度の57～71%、平成19年度の80%超、と比較すると最低である。前年度に良好な状況になったと判断していたので今回の顕しい減少に至った要因を把握しなければならない。

○計画系2

『必要度』は100%で、過去6年間の平均が91%であり、必要性は常に高く認識されている。[教育実状]の『適正度』は85%で、これまでは、平成16年度の72%が最も低く、それ以降は80%を超え、平成19年度は89%であった。今回、前年度よりはやや低くなったものの高い値を保っており、良好な状態が継続されている。『到達度』は70%で、これまでは、平成14年度の47%が最も低く、平成15年度は67%に増え、その後は70%台で推移していた。今回はその傾向が継続しているが、70%という値は『必要度』と『適正度』に比べると高くないため、今後も改善していかねばならない。

○環境系

『必要度』は100%で、過去6年間も平均93%の高い数値であり、必要性は高く認識されている。[教育実状]の『適正度』は76%で、この値は、過去6年間が90%以上の値(平均95%)で推移していたことと大きく異なっている。このようになった要因を把握して改善していかねばならない。また、『到達度』は38%という非常に低い値である。過去6年間の『到達度』の数値は、平成15・16年度の80%超の高い値や、それら以外の60%～71%と、これまでばらついてきた。しかし、今回の38%は過去6年間よりも低く、最低の数値であり、前年度の平成19年度の66%よりも28ポイントも減少している。この著しい低下に至った要因を把握して改善が行えるようにしなければならない。

このように環境系における今回の『適正度』と『到達度』のそれぞれの数値は、建築学科の他の科目の中で最も低いいため、授業の内容や方法等、早急な改善が望まれる。

○構造系1

『必要度』は100%で、過去6年間90%以上を保っており(6年間の平均94%)、必要性が高く認識されている。[教育実状]の『適正度』は93%で、過去6年間の80%前後の推移(6年間の平均79%)に比べると高い値を示している。『到達度』は51%で、これまでは、平成14・16・17年度に50%以下であったが、平成18・19年度には70%前後に上がっていた。今回は前年度の平成19年度よりも20ポイント程、下がったことになる。

今回、『適正度』がこれまでの最高であったのに、『到達度』が以前のような低い値に戻ったので、今後、学生が授業の内容を一層理解できるように様々な工夫を行って改善していくことが望まれる。

○構造系2

『必要度』は100%で、過去6年間、常に90%以上の高い値を示しており(6年間の平均95%)、必要性が高く認識されている。[教育実状]の『適正度』は90%で、これまで常に80%以上の高い値(6年間の平均86%)を維持しており、適正と判断されている。

『到達度』は61%で、これまで、平成14年度の40%が最低で、平成16年度の57%が次に低く、これら以外は70%台であった。今回、近年の70%台よりも10ポイント程減少している。『適正度』は高い数値を示しているため、『到達度』が上がるように改善していかねばならない。

○生産系

『必要度』は98%で、これまで、平成18年度の87%が最低で、6年間の平均は93%で、必要性が非常に高く認識されている。[教育実状]の『適正度』は78%で、これまで、平成17年度の66%が最低で、他は76%以上で、前年度の平成19年度は91%にも達していたが、今回は13ポイントの減少となっている。『到達度』は62%で、これまで、平成14年度の38%、平成16年度の51%、平成18年度の61%が低く、平成19年度は77%と上がっていたが、今回15ポイントの減少となっている。

『適正度』と『到達度』が前年度よりも減少しているため、その要因を把握しなければならない。

○実験

『必要度』は100%で、過去6年間、常に90%以上の高い値であり（6年間の平均94%）、必要性が非常に高く認識されている。[教育実状]の『適正度』は85%で、過去6年間、常に85%以上（6年間の平均92%）で、適正と判断されている。『到達度』は78%で、これまで、平成14年度の63%が最も低く、平成15・16年度は80%を超え、平成17年度以後は70%台であり、今回は近年の傾向を継続している。

『到達度』の値は建築学科の科目の中で最も高い値であり、『必要度』・『適正度』も含め、改善が継続的に行われていると判断される。

○建築設計演習

『必要度』は98%で、過去6年間、常に90%以上（6年間の平均95%）と高く、必要性が非常に高く認識されている。[教育実状]の『適正度』は78%で、これまで、平成17年度の65%が最も低く、他は75%以上あり、前年度の平成19年度は6年間で最も高い89%であった。今回は、平成19年度よりも11ポイント減少したことになる。『到達度』は59%で、これまで、平成17年度の54%が最も低く、他は76%以上の値を示しており、平成19年度は6年間で最も高い94%であった。今回、前年度よりも35ポイントという著しい減少となった。

『適正度』と『到達度』が前年度よりも低下しており、特に『到達度』が顕著な低下となっているため、その要因を把握して改善していかなければならない。

○建築学科専門科目計

『必要度』は99%で、過去6年間、常に90%以上（6年間の平均92%）であり、高い必要性が認識されていることがわかる。今回の99%は、過去6年間よりも高い値である。[教育実状]の『適正度』は84%で、これまで、平成17年度の78%が最も低く、その他は80%以上であり、今回もその傾向が継続されており適正と判断されていることがわかる。『到達度』は60%で、これまで、平成14年度の55%が最も低く、それ以後は65%以上で、平成19年度は6年間で最も高い78%であった。今回は前年度よりも18ポイントの減少であった。

『必要度』・『適正度』が高い値を示しているのに『到達度』が昨年度に比べて減少している。特に、平成19年度よりも20ポイント以上減少しているのは9科目中、建築学基礎（20ポイント）・計画系1（25ポイント）・環境系（28ポイント）・構造系1（20ポイント）・建築設計演習（35ポイント）の5科目もある。

今回の平成20年度と平成19年度との大きな隔たりはどこに起因するのか、しっかりと探っていって改善につなげていかなければならない。

【D：学習・教育目標に関する設問】について

A-1. 豊かな教養があり、多角的に物事をとらえる能力を備えている

[教育実状]について、5学科全体の『適正度』は85%である。過去6年間の推移は48, 57, 72, 75, 69, 75%であり、それから今回大きく向上している。特に、物質工学科は97%と非常に高い割合となっている。次に、5学科全体の『到達度』は70%であり、過去6年間の推移が45, 47, 60, 63, 58, 64%であったことから、引き続いて増加の傾向がみられることがわかる。

A-2. 高い倫理観を持ち、環境保全に関する責任を自覚する能力を備えている

5学科全体の『適正度』は81%である。過去6年間の推移は47, 62, 73, 62, 66, 73%であり、今回大きく改善されていることがわかる。特に、物質工学科は94%と高い。次に、5学科全体の『到達度』は70%である。過去6年間の推移は50, 58, 63, 63, 63, 60%であり、これらと比べて最も良好な数値を示している。物質工学

科が84%と高い一方で、建築学科が50%と比較的低いことが目立つ。

A-3. 日本語や外国語によるコミュニケーション・発表能力を備えている

5 学科全体の『適正度』は77%である。過去6年間の推移は35, 40, 57, 56, 65, 56%であり、今回過去の数値よりも良好な値となっている。物質工学科の87%, 電気工学科の85%が特に高い。次に、5 学科全体の『到達度』は58%であり、過去6年間の推移が26, 29, 42, 54, 52, 56%であることから、前年度から少し向上していることがわかる。電気工学科が74%と比較的高い一方で、建築学科が50%と比較的低くなっている。

B-1. 系統的に修得した工学の基礎および専門分野の知識を備えている

5 学科全体の『適正度』は89%であり、これは過去6年間の推移77, 79, 86, 84, 80, 83%から見ても良好な数値である。また、全ての学科で80%以上の良好な値を示しており、特に電気工学科は94%と高い。次に、5 学科全体の『到達度』は74%である。過去6年間の推移は55, 66, 68, 76, 71, 72%であり、これらの数値と比べて比較的良好な値であることがわかる。建築学科が58%と比較的低くなっているのが目立つ。

B-2. 専門分野における自己啓発・向上能力を備えている

5 学科全体の『適正度』は83%である。過去6年間の推移は60, 67, 81, 73, 77, 78%であり、これらから今回の値は良好な値であるといえる、5 学科全体の『到達度』は72%であり、過去6年間の推移50, 55, 66, 67, 70, 70%から、全体的には継続して改善されていることが見てとれる。しかしながら、電子情報工学科は平成18年度の38%から前回の平成19年度は62%と向上し、今回はそれを維持して61%となったが、まだ5 学科全体の平均値よりも低い値であり継続した改善が必要とされる。

B-3. 幅広い専門知識と学際性を備えている

5 学科全体の『適正度』は83%であり、過去6年間の推移57, 64, 73, 73, 70, 73%と比較して、良好な結果となっている。どの学科も70%を超えており、特に電気工学科、物質工学科、電子情報工学科は80%台後半の良好な値となっている。次に、5 学科全体の『到達度』は65%となっている。過去6年間の推移は39, 47, 56, 65, 62, 57%であり、今回、比較的良好な値であることがわかる。しかしながら、建築学科以外の学科が70%前後であるのに対して、建築学科が47%と比較的低い値であることが目立つ。

C-1. ものづくりで養われた実践的な創造性を備えている

5 学科全体の『適正度』は87%である。過去6年間の推移57, 65, 76, 74, 74, 78%と比較して非常に良好な値となっている。特に、機械工学科は96%, 電気工学科は91%と高い。次に、5 学科全体の『到達度』は69%であり、過去6年間の推移49, 58, 62, 68, 67, 70%から、過去3年の値と同程度であるといえる。全ての学科が60~70%台である。

C-2. 論理的思考能力と課題探求・解決能力を備えている

5 学科全体の『適正度』は87%である。過去6年間の推移は65, 69, 76, 76, 71, 78%であり、改善が見られる。全ての学科が80%以上である。次に、5 学科全体の『到達度』は70%である。過去6年間の推移は55, 53, 61, 66, 65, 64%であり、これらの数値と比較して今回の数値は向上している。全ての学科が60~70%台である。

C-3. ものごとを企画し計画的に進める能力を備えている

5 学科全体の『適正度』は84%であり、過去6年間の推移59, 72, 80, 72, 70, 84%から、6年間で最も良かった前回と同じ値となっており比較的良好な数値であるといえる。建築学科以外の学科が80%以上であるのに対して、建築学科が74%と少し低い。5 学科全体の『到達度』は71%である。過去6年間の推移は52, 58, 63, 70, 67, 73%であり、前回は少し下回った。電子情報工学科は『適正度』が84%（前回85%）と高いものの、『到達度』が58%（前回65%）と比較的低くなっており、これは授業は適正に行われているが本学習・教育目標が思うように身に付いていないと感じている学生が多く存在するからだと思われる、『到達度』の改善が望まれる。また、建築学科は『適正度』が前回の86%から今回は74%と減少し、それに伴ったかたちで『到達度』も前回の69%から61%へと下がっており、『適正度』ならびに『到達度』の改善が望まれる。なお、他の3学科の『到達度』は80%前後である。

全体としては

各学習・教育目標の[教育実状]の『適正度』および『到達度』について全体的にみて改善が進んでいるといえる。

5 学科全体の『適正度』は学習・教育目標のA-1, A-2, A-3, B-1, B-2, B-3, C-1, C-2に対して過去の数値から大幅に改善されている。C-3についても過去の最も良い数値と同じである。これらから本校における[教育実状]の改善が進んでいるといえる。

5 学科全体の『到達度』はA-1, A-2, A-3, B-1, B-2, C-2で向上がみられる。他の項目も過去6年間とほぼ同じ程度である。しかしながら、A-3において5学科全体で58%と比較的低い値となっており、継続した改善が必要であると思われる。学科別では建築学科で低い値である項目が多かったように思われたが、年度によって異なる学生の気質による可能性がある。他の項目も同じであるが、次年度以降の数値の推移に注目する必要がある。

【E：その他に関する設問】について

○TOEIC 関係の英語教育

学科間で10%程度の差が見られ、『役に立った』あるいは『それなりに役に立った』との回答が機械工学科、電気工学科、電子情報工学科ではおよそ70%前後であり、物質工学科と建築学科では85%弱であった。学科間の差の原因については調査する必要があると思われる。また、今後は、全学科においてさらに改善していく試みを積極的に行っていくことが必要であると考えられる。

○2年次の混合学級

『良い制度』あるいは『それなりに良い制度』との回答は全学科でおよそ90%弱で、学科間に大きな差はない。過去6年間と比較しても最近の過去4年間とほとんど同様であることから混合学級制度が定着し、学生には高い評価である。

○授業外単位制度

『良い制度』あるいは『それなりに良い制度』との回答が全学科でおよそ90%で、学科間に大きな差はない。過去6年間と比較しても最近の過去3年間とほとんど同様である。『良い制度』の回答が全学科で60%と高いことから、授業外単位制度の内容については時代とともに、社会の動向や自由意見にあるような学生のニーズを継続してさらに調査していく必要があると考えられる。

○追認制度

『良い制度』、『それなりに良い制度』との回答が全学科で 85%程度と高い。しかしながら、学科間のばらつきが大きく、機械工学科では 70%と低く、建築学科では 97%と非常に高い。これは、過去 6 年間と比較すると、追認制度を肯定する意見が多いのは同様であるが、学科間の大きな差については異なっている。自由意見も参考に追認試験の適正な実施が行われているか検討する必要があると考えられる。

○1～3 学年次の LHR

『有意義だった』、『おおむね有意義だった』との回答が全学科で 80%と高い。なお、建築学科のみ 65%と低い。また、過去 6 年間と比較すると、建築学科においては過去 2 年間とほとんど同じであるが、他の 4 学科については大幅に改善されている。これについては、その原因について明らかにするべきである。

○教育行事（阿蘇研修，研修旅行，夏期実習，特別講演等）

『有意義だった』、『おおむね有意義だった』との回答が全学科でおよそ 85%と高い。また、学科間に大きな差はない。さらに、過去 6 年間と比較すると大きく改善されており、教育行事が学生にとってより充実したものになっていることが伺える。

○特別活動 2（体育祭，高専祭，球技大会，歓迎行事等）

『有意義だった』、『それなりに有意義だった』との回答が全学科で 85%以上と高い。また、学科間にもそれほど大きな差は見られない。さらに、過去 6 年間と比較しても、ほぼ同様に高い値で推移しており、特別活動 2 が学生にとって有意義なものとなっていることが分かる。

○シラバスは役にたったか

『役に立った』、『それなりに役に立った』との回答が全学科で 65%程度であった。これは、過去 6 年間と比較しても徐々に改善しているといえるが、まだ改善の余地が残っている。また、学科間の差が大きく、機械工学科では 50%、建築学科では 75%となっており。特に、機械工学科においてはシラバスがより活用されるように工夫することが必要である。

○レポート等のフィードバックはどうだったか

『適正』、『おおむね適正』との回答が全学科で 70%程度であった。また、学科間の差が大きく、機械工学科と電気工学科では 65%、物質工学科では 80%強となっており。特に、機械工学科と電気工学科においてはレポート等のフィードバックをより適切に行う必要がある。

○授業時間外の学習指導体制（補習・オフィスタイム制度）の制度の必要性

[必要性]について、『必要』、『それなりに必要』との回答は全学科で 80%と高く、過去 6 年間と比較しても非常に高い。しかしながら、学科間の差が大きく、電気工学科では 65%程度と低いが、物質工学科では 97%と非常に高い。

○授業時間外の学習指導体制（補習・オフィスタイム制度）の制度の実状

[実状]について、『機能していた』、『それなりに機能していた』との回答は全学科で 65%程度であり、過去 6 年間と比較してもかなり改善されているものの、まだ改善の余地があると考えられる。また、各学科では[必要性]と[実状]についてはほぼ同様の傾向を示しているが、電気工学科、物質工学科、建築学科では[必要性]に比べて、[実状]は 10～20%程度低下していることから、学生のニーズは高くなってきているので、さらなる改善が必要であると考えられる。

○教員の授業時間外での教科目に対する全般的な対応

『よい対応だった』、『おおむねよい対応だった』との回答は全学科で 85%程度と高く、過去 6 年間と比較しても高い値を示しており、良好であるといえる。また、各学科では電気工学科の 75%から物質工学科の 94%であり、学科間で 20%程度の差が見られる。

○授業改善アンケートの反映

『よく反映されている』、『おおむね反映されている』との回答は全学科で 60%弱であり、過去 4 年間と比較するとかなり改善されている。しかしながら、まだ不十分であるため、学生からの意見を真摯に受け止め、授業を継続して改善していくことが望まれる。また、学科間に大きな差はみられない。

○学修単位について、自学自習 30 時間の科目を意識したか

『意識した』、『ある程度意識した』との回答は学科間に大きな差はなく、全学科で 40%と非常に低い。自学自習が 30 時間の科目の担当者は、学生に対して意識付けをより積極的に行っていく必要がある。

○学校の事務サービス（学生課・図書館・福利施設等での対応等）

『よかった』、『おおむねよかった』との回答は全学科で 80%強と、過去 6 年間と比較してもほぼ同様に良好な評価である。今後も継続して、サービスの向上に努めることを願う。

○進路支援

『よかった』、『おおむねよかった』との回答は全学科で 80%強であり、特に物質工学科は 90%以上と高い。全学科とも、継続して進路支援の対応の向上に努めていただきたい。

○課外活動（部活動等）の指導

『よかった』、『おおむねよかった』との回答は全学科で 80%弱と比較的高く、過去 6 年間と比較してもほぼ同様である。しかしながら、学科間の差が大きく、電気工学科では 60%を下回っており、建築学科では 97%と非常に高い。

○学生相談室の利用

『利用したことがある』との回答は全学科で 12%となっており、学科間に大きな差はない。また、過去 2 年間と比較すると、倍増していることから、今後は増加傾向になるのではないかと予想される。なお、保健室の看護師も学生相談室メンバーであり、普段学生が保健室で相談していることが、ここの調査に反映されているかかもしれない。

○学生相談室での対応

『対応がよかった』あるいは『対応がおおむねよかった』との回答は全学科で 80%となっている。しかしながら、一つ前の設問において相談したことのある学生数は全学科で 19 名であるのに対し、本設問では 47 名が回答していることから、データの精度に関して多少疑わしい。学生相談室の存在や活動内容を学生に継続して説明し続けていくことを期待する。

○寮の運営・指導

『良かった』、『おおむね良かった』との回答は全学科で 60%強であり、過去 6 年間と比較しても若干改善傾向を示している。しかしながら、寮内の規律を守るためにはある程度厳しい指導が必要であり、今までと同様の低い結果が続いていると思われる。これまで、寮についても様々なことを改善してきていると思われるが、本アンケートの結果とその対応策をきちんと在寮生に説明する必要があると思われる。

【自由意見】

38 名（機械工学科 M : 5, 電気工学科 E : 3, 電子情報工学科 I : 10, 物質工学科 C : 2, 建築学科 A : 18）から意見が寄せられた。今回、設問を、前回までの「その他意見があれば記述してください」から「有明高専が良くなるアイデアがあれば記述してください」に変更したため、前回までであったような不平不満の記述はほとんどなくなり、建設的な意見が多数を占めている。それぞれの意見を、①教務に関すること、②学生指導に関すること、③寮生活に関すること、および④その他に分類し、以下にまとめた。

①教務に関すること

(M, A) 英語教育の強化が必要。

(M) 体育の採点基準がよくわからない，曖昧すぎる気がする。

(I) 一般教養（特に広い視野を持つのに必要な芸術分野）をもう少し充実させる。

(M, E, I, C) 追認試験が甘い（定期試験で頑張ることがバカバカしく思える），仮進級の許容単位数を少なくする。

(I) 追認はその年度にしたらどうか。

(I) 留年した場合，落とされた単位だけを再履修する制度にしたら，退学者が減ると思う。

(I, A) 授業改善アンケートはあまり機能していない。もっと反映させるべきである。

(I, A) 検定よりはるかに難しい国家資格等も授業外単位として認定するべきである。

(I) 学科レポートの手書き強制等を改めるべき。

(A) レポートを見直す時間的余裕があれば良い。

(A) 建築では，テストと製図の提出，卒論提出が重なるので，もう少し余裕のあるスケジュールにした方が良い。

(A) 4年次に授業が詰め込まれており，部活をしている身としては非常に苦しかった。

(A) 夏休みの時期が移行したが，きつい。早くそれにあつたスケジュールを組んでほしい。

(A) パワーポイントでの授業は，頭が悪くなる。（情報量が多い，ポイントがつかめない）

(A) 進学者への特別授業をして，難関校への進学率を増加させ，魅力を増加させる必要がある。

(A) もう少し，実務的な授業があってもいいと思う。

(I) 留学の選択肢を広げる。

(A) 表面的な指導しか行われていない気がする。真の技術者を産むためには，根本的な改善が必要と思う。

(A) 就職活動での欠課を公欠にしてほしい。前期のみの必修の欠課時数が危なくなるので。

②学生指導に関すること

(M) 機械科の先生は学生について甘い，やさしさとの区別を持ってほしい。

(I) 低学年での人間関係のこじれを修復するような体制がほしい。いささか無頓着すぎる。

③寮生活に関すること

(M) 持ち込みDVDは例外なくOKにしてほしい。

(A) 寮はもっと寮生の自主性を尊重すべき。

(A) 寮生活は楽しかった。

④その他

(A) 雨が建物内に降り込まないようにしてほしい。

(E, 2) アンケートが多すぎる。

(I) マークシートの形式を統一してほしい。

(A) 車通学にしてほしい。車でしか来れない環境があるにも関わらず，車通学が不可というのはおかしいです。

(A) 挨拶等伝統的なものは続けてゆくべきだと思う。

(A) 高専の先生は機嫌の悪さを人に当たり散らす大人げない人が多い。質問に行く時もいちいち先生の顔色をうかがうのは変だと思う。

(M, I, C, A2件) 5年間お世話になりました。楽しかったです。有意義な5年間かったです。

2.2 専攻科生修了時アンケート

現在までに実施した専攻科生修了時アンケートの実施時期、回答者数等は下の通りであり、今回の分析は、平成20年度卒業生分を、過去6回あるいは前年度と比較しながら分析した。

5年生と同様、個々の分析の詳細は後述の通りであるが、今回の分析における全体的な傾向は、電子情報系が好評価に転じていること、逆に、応用物質工学専攻および建築学専攻での評価が悪くなっていることである。とくに、応用物質工学専攻では、評価値が激減している項目が見受けられる。

	実施時期	対象者数	回答者数	回答率
平成14年度修了生	2003年1月	23名	23名	100%
平成15年度修了生	2004年1月	18名	17名	94%
平成16年度修了生	2005年2月	19名	19名	100%
平成17年度修了生	2006年1月	27名	27名	100%
平成18年度修了生	2007年2月	24名	24名	100%
平成19年度修了生	2008年1月	23名	23名	100%
平成20年度修了生	2009年2月	33名	33名	100%

卒業時アンケートと同様、多くの設問において、回答合計数に対する肯定的な回答数のパーセンテージを『〇〇度』と表記している。ただし、下の【A】で記述した各専攻や系での回答者数を見れば分かる通り、それらは少数である。したがって、各専攻や系での分析では、回答者数での分析では、回答者数が少ないことを留意しておいていただきたい。

【A：回答者自身に関する質問】について

平成20年度修了生は、生産情報システム工学専攻機械系8名、同電気系5名、同情報系7名、応用物質工学専攻6名、建築学専攻7名の計33名である。

修了生の進路は、就職が22名、進学が8名、その他が2名であり、進学率はおよそ33%である。特に電気系に進学者が多い。

【B：教育全般の総括に関する設問】について

「一般教育」における『満足度』は58%とあまり高くない。これは過去6年間と比較するとかなり低い。特に、20%程度（6名）が『不満である』と回答していることについては真摯に受け止め、その原因について検討する必要があると考えられる。ただし、昨年度までと比較して、一般教育全般の内容等が昨年度のみ急に変化することは考えられないので、来年の結果を注視しておきたい。

「専門教育」における『満足度』はおよそ50%と高くない。特に、電気工学科については評価が著しく低いことから、検討する必要があると考えられる。しかしながら、「一般教育」と同様、昨年度までの全学科の6年間の平均は81%と高かったことから、今年度の結果はデータの母数の少なさによる影響と考えられるものの、専門教育の充実についての検討が求められる。

「教育・研究環境」における『満足度』はおよそ56%と高くない。特に、建築学科については33%と評価が低い。しかしながら、過去6年間の5学科の平均は81%であったことを明記しておく。

「学業以外の学生生活」における『満足度』はおよそ85%と高い。これは過去6年間と同様に高い評価である。

「期待していた学力が果たしたか」について、『ついた』、『おおむねついた』との回答はおよそ58%であった。過去2年間と比較して10ポイント以上減少している。

【C：科目教育に関する設問】について

○一般科目（英語，日本語，社会科目）

まず，[必要性]についてであるが，全専攻の『必要度』は91%である。過去6年間の平均は92%であり，ほぼ同じくらいの高い数値を示している。次に，[教育実状]について，全専攻の『適正度』は64%であり，過去6年間の平均84%よりも大幅に低くなっている。専攻別では，電子情報系の100%から物質工学専攻の33%まで幅がある。何らかの原因があるのか，あるいは一過性のものなのか経年変化を見ていく必要がある。次に，全専攻の『到達度』は61%である。過去6年間の平均は61%であり，ほぼ例年と同じ数値となっている。電子情報系が100%であるのに対して，応用物質工学専攻が17%，電気系が40%と低いのが目立つ。

○基礎専門科目（数学，物理，科学，環境化学）

全専攻の『必要度』は88%であり，この数値は過去6年間の平均値と同じである。次に，全専攻の『適正度』は82%である。過去6年間の平均86%とほぼ同じである。『必要度』と『適正度』には専攻による差は見られない。次に，全専攻の『到達度』は55%である（過去6年間の平均は61%）。専攻別にみると，電気系の20%，応用物質工学専攻の33%，建築学専攻の43%が低くなっている。

○特別研究

全専攻の『必要度』は94%であり，過去5年間の平均97%とほぼ同じ程度である。次に全専攻の『適正度』は79%であり，過去5年間の平均89%と比べると低くなっている。機械系が50%と低くなっている。次に，全専攻の『到達度』は82%であり，過去5年間の平均90%より少し低くなっている。機械系が63%，電子情報系が71%と比較的低く低くなっており，改善が必要と思われる。

○技術英語

全専攻の『必要度』は79%であり，過去5年間の平均90%と比べて低い。特に，建築学専攻で57%と低くなっている。次に，全専攻の『適正度』は69%であり，過去5年間の平均78%と比べて9ポイント下がっている。応用物質専攻が50%，機械系が57%，電気系が60%と比較的低くなっている。次に，全専攻の『到達度』は55%であり，5年間の平均62%より下がっている。各系・専攻別にみると，電気系の40%から機械系の63%までの比較的低い範囲に分布している。全体的に継続して改善が必要であろう。

○創造設計合同演習

全専攻の『必要度』は76%であり，過去2年間の平均77%とほぼ同じである。電子情報系の100%と比較して機械系は50%と低い。次に，全専攻の『適正度』は70%であり，過去2年間の平均77%より若干低い。電気系の40%，応用物質工学専攻の50%が低くなっている。次に，全専攻の『到達度』は49%であり，過去2年間の平均58%よりも低い。電子情報系が86%であるのに対して，応用物質工学専攻は17%，電気系は20%と低くなっている。このように専攻・系でばらつきが生じている原因を明らかにして，対策を講じる必要があると思われる。

○合同特別実験

全専攻の『必要度』は73%であり、過去2年間の平均68%よりも若干増加している。電子情報系と建築学専攻が86%と高い。次に、全専攻の『適正度』は70%である（過去2年間の平均76%）。電子情報系および建築学専攻が86%と高いが、その一方で、電気系が40%と低くなっている。次に、全専攻の『到達度』は70%であり、過去2年間の55%よりも大幅に向上している。特に、電子情報系では100%と高い。一方で、電気系では40%、応用物質工学専攻では50%と低い。今回の専攻別・系別の傾向は過去2年間の傾向と少々異なっているので、もう少し長期的に調査していく必要があると思われる。

○特別実験

全専攻の『必要度』は89%であり、平成並みの比較的高い値を示した。なお、過去6年間は、平成14～18年度が83～100%、平成19年度が65%となっていたのが、回復したかたちとなった。次に、全専攻の『適正度』は64%である。過去6年間は、平成14～18年度が82～100%、平成19年度が74%であり、これから今回さらに低下していることがわかる。応用物質工学専攻が0%（6名全員が否定的な回答）となっており、この原因を明らかにして改善する必要があるだろう。次に、全専攻の『到達度』は57%であり、過去6年間は68～95%であったことから、大幅に低下していることがわかる。特に、応用物質工学専攻が17%と低くなっており、これは『適正度』が低いことに関連しているものと思われる。なお、応用物質工学専攻以外では『到達度』は68%であり、決して高い値ではない。このことから、応用物質工学専攻においてはもとより、他の各系・専攻において特別実験のさらなる充実を図ることが必要であると思われる。

○特別演習

全専攻の『必要度』は79%であり、過去6年間とも87%以上だったことを考えると低い数字である。特に機械系では50%と低くなっている。次に、全専攻の『適正度』は79%である。過去の3年間の推移は100, 84, 91%であるので、若干低下している。特に機械系が50%と低くなっていることが目立つ。次に、全専攻の『到達度』は55%であり、過去3年間の推移が89, 89, 91%であることを考えると大幅に低下しており、極めて悪い数値である。特に機械系が25%、電気系が40%と低い。特定の系で低い値になっている原因を明らかにし、対策を講じる必要があるだろう。

○特別実習Ⅰ

全専攻の『必要度』は88%であり、平成14～18年度が74～93%、平成19年度が87%であることと比較すると平成並みの値である。次に、全専攻の『適正度』は85%であり、平成14～18年度が78～88%、平成19年度が87%であり、ほぼ平成並みといってよいと思われる。次に、全専攻の『到達度』は79%である（平成14～18年度が58～82%、平成19年度が87%）。

○特別実習Ⅱ

平成19年度に新設された科目である。全専攻の『必要度』は74%であり、平成19年度は100%である。次に、全専攻の『適正度』は68%（平成19年度は91%）である。次に、全専攻の『到達度』は63%（平成19年度は91%）である。そもそも、この科目を実際に受講した学生は極めて少ないことから、現在のアンケートの取り方は適切ではなく、実際に受講した学生のみを対象とする等の工夫をする必要があると思われる。

○地域協働演習Ⅰ・Ⅱ

平成19年度に新設された科目であり、本アンケートの対象となったのは今回が初である。全専攻の『必要度』は52%、『適正度』は42%、『到達度』は44%であり、どの項目も低くなっている。建築学専攻は比較的肯定的な意見の割合が高いが、それ以外は否定的な意見の割合が高い。当該科目のあり方等を十分に検討する必要がある。

○専門科目

全専攻の『必要度』は91%である。過去4年間は96～100%であったことを考えると若干低い。機械系が75%と少し低いのが目立つ。次に、全専攻の『適正度』は76%であり、平成18年度が88%、平成19年度が87%と比べて低い値となっている。次に、全専攻の『到達度』は76%である。過去4年間の推移が89, 93, 63, 74%であり、近年の低下傾向を維持したかたちとなっている。応用物質工学専攻では『必要度』『適正度』『到達度』ともに100%で良好であるが、それ以外は比較的低い値となっている。専攻科では専門性を高めるということが目的のひとつであり、そのためには専門科目の充実が不可欠である。専門科目が充実するための方策を検討する必要がある。

○複合的資質を育成する科目

全専攻の『必要度』は76%であり、過去の範囲78～81%よりも若干低い。これについては各専攻・系に大きな差はない。次に、全専攻の『適正度』は76%であり、過去の範囲83～91%と比べると低くなっている。電子情報系が100%であるのに対して、電気系が40%と低いのが目立つ。次に、全専攻の『到達度』は67%であり、過去3年間は56, 50, 65%と推移していることを考えると増加傾向が見られる。電子情報系が100%であるのに対して電気系が40%、建築学専攻が43%と低くなっている。

【D：学習・教育目標に関する設問】について

A-1. 豊かな教養があり多角的に物事を捉える能力を備えている

[教育実状]に関しては、『適正度』はここ数年間の平均84%に対して、今回15ポイント減少し69%であった。『到達度』については、ここ数年間の平均72%に対して、今回9ポイント減少し63%であった。過去3年間の『到達度』は67, 50, 83%となっており、平成19年度で83%と大きく改善がみられたものの、平成20年度で20ポイントも減少しており、この原因について調査する必要がある。

専攻毎では、従来高い値であった応用物質工学専攻が今回『適正度』50%と低く、特に『到達度』は33%と他系に比べても低くなっている。

A-2. 高い倫理観を持ち環境保全に関する責任を自覚する能力を備えている

[教育実状]に関しては、『適正度』はここ数年間の平均87%に対して、今回88%とここ数年間の値とほぼ同様の結果となった。専攻毎で見ると、電気系、電子情報系、応用物質工学専攻がそれぞれ100%、機械系88%と高く、建築学専攻のみ57%と低くなっている。この目標に関しては、おおむね高い適正度で教育が行われているといえる。

『到達度』は81%で多くの学生が満足できる『到達度』であったと回答しており、この教育目標に関しては、高いレベルで目標が達せられている状態であると思われる。個別にみると、電気系100%や機械系、電子情報系、応用物質工学専攻の83～88%に対して、建築学専攻は57%と低くなっている。

本目標に関連する科目は技術者倫理や環境科学などであり、科目の担当教員が、授業における工夫や改善をし、その結果、学生が授業内容を効果的に理解することができていると考えられる。一方で、建築学専攻のみが『適正度』・『到達度』ともに低い原因を追究し、改善をすることでさらにこの教育目標は高いレベルの教育が行えるものと思われる。

A-3. 日本語や外国語によるコミュニケーション・発表能力を備えている

[教育実状] に関しては、『適正度』はここ数年間の平均 71%に対して、今回 18 ポイント減少し 53%であった。この値は他の学習・教育目標に比べて最も低い。専攻毎では、電気系は 100%と非常に高いものの、機械系 50%、建築学専攻 43%、応用物質工学専攻 17%と低い。特に応用物質工学専攻は過年度と比べて今回急激に減少しており、注意する必要がある。

『到達度』も 41%と低い。専攻毎で見ると、電気系 80%を除き、応用物質工学専攻 17%、電子情報系 33%、機械系 38%、建築学専攻 43%と 50%を下回る値となっている。

本目標に関連する科目としては語学系科目（日本語コミュニケーション、英語）と実習系科目（特別研究など）があるが、一般科目（英語、日本語コミュニケーション、社会系科目）の『到達度』は平均 61%、特別研究では 82%であり、本目標の達成度を改善するためには、語学系の科目について、重点的に検討することが効果的であると考えられる。

この教育目標は、平成 19 年度にいったん改善の兆しが見られたものの、平成 20 年度ではまた厳しい結果となった。多くの学生が本目標の教育実施状況に満足しておらず、達成感も得られていないことを示すこの結果は、憂慮すべきものと思われる。この結果に対する詳細な検討を行い、改善策を策定・実施することによるよりいっそうの改善が期待される。一方で、電気系の学生が高い評価としていることに注目し、その原因について調査し、改善策の一つとしてみてはどうか。

B-1. 系統的に習得した工学の基礎と専門分野の知識を備えている

[教育実状] について、『適正度』は 84%と高く、ここ数年間の平均値 86%とほぼ同様の結果となった。本目標に関する教育実施状況はかなり高いレベルであるものと判断される。

『到達度』はここ数年間の平均 78%に対して、今回 15 ポイント減少し 63%であった。専攻毎では、過去 3 年間、80%以上の『到達度』であった応用物質工学専攻が今回 33%と急激に値を下げている。

本目標に関連する科目は、専門科目（所属専攻・系の科目）、専門基礎科目（数学、物理、科学、環境化学）および技術英語である。

専門科目（所属専攻・系の科目）の[教育実状]の『適正度』と『到達度』は、それぞれ 76%、67%である。特に、応用物質工学専攻は、『適正度』、『到達度』とも 100%であり、応用物質工学専攻学生が本教育目標の『到達度』を低くした原因は、専門科目（所属専攻・系の科目）ではないということを示していると思われる。

専門基礎科目（数学、物理、科学、環境化学）では[教育実状]の『必要度』は 71~100%とどの系の学生も必要性を認識しており、『適正度』は 82%と高い。しかし、『到達度』は 55%とやや低く、特に電気系、応用物質工学専攻、建築学専攻は 50%を下回っており、他系に比べ低い。これは、適正な授業が実施されているにも関わらず、その内容が思うように身に付かないと感じている学生が多く存在するということであり、『到達度』をあげていくような改善が必要であると思われる。

技術英語に対する[教育実状]の『適正度』や『到達度』は、それぞれ 69%、55%と低い。特に『到達度』は 40~63%とどの系も低い状況にある。本科目は、専門専攻の教員が独自の方法で実施している科目であり、各担当教員の一層の工夫と改善努力が必要であると考えられる。

B-2. 専門分野における自己啓発・向上能力を備えている

〔教育実状〕については、『適正度』のここ数年間の平均 88%に対して、今回 16 ポイント減少し 72%であるが、比較的高い値であり、本目標に関する教育実施状況はおおむね適正であるものと判断される。専攻毎では電気系が 40%と他系にくらべて低い。『到達度』はここ数年間の平均 78%に対して、今回 15 ポイント減少し 63%であった。専攻毎では応用物質工学専攻が 33%、電気系が 40%と他系の 71%~83%にくらべて低く、その原因を調査し、改善する必要があると思われる。

B-3. 幅広い専門知識と学際性を備えている

〔教育実状〕については、『適正度』のここ数年間の平均 80%に対して、今回 75%と 5 ポイント減少したが、年度毎の変化もほとんどなく、適正であると評価できる。専攻毎に見ると、電気系、電子情報系、応用物質工学専攻の『適正度』が 80%以上あるのに対し、建築学専攻は 57%と低い。

『到達度』については、ここ数年間の平均 68%に対して、今回 47%と 21 ポイント減少した。専攻毎で見ると、電気系 20%、応用物質工学専攻 33%、建築学専攻 43%で 50%を下回る低い値となっている。

『適正度』は高く、一方で『到達度』が低いという今回の結果より、本教育目標に関しては、適正な授業が実施されているにも関わらず、その内容が思うように身に付かないと感じている学生が多く存在するということであり、『到達度』をあげていくような改善が必要であると思われる。

C-1. ものづくりで養われた実践的な創造性を備えている

〔教育実状〕については、『適正度』はここ数年間の平均は 83%で、今回 66%と 17 ポイント減少した。専攻毎で見ると、応用物質工学専攻 33%、建築学専攻 43%が 50%を下回る低い値となっている。

『到達度』については、ここ数年間の平均は 74%で、今回 63%と 11 ポイント減少した。専攻毎で見ると、応用物質工学専攻が 33%で特に低い。

専攻によっては、特別研究などの内容と「ものづくり」との関連についてを十分に説明する必要があると思われる。

C-2. 論理的思考能力と課題探究・解決能力を備えている

〔教育実状〕については、『適正度』はここ数年間の平均は 90%と高く、今回 78%と 12 ポイント減少した。専攻毎に見ると、機械系の 63%が少し低いが、そのほかはすべて 80%以上である。これらのことから〔教育実状〕はおおむね適正であると評価できる。『到達度』については、ここ数年間の平均は 80%と高く、今回 69%と 11 ポイント減少した。専攻毎では 63%~80%でそれほどおおきな差はみられない。本教育目標については、平成 20 年度の平均値に少し減少がみられるが、全般的に見ておおむね適正であると評価できる。

C-3. ものごとを企画し計画的に進める能力を備えている

〔教育実状〕については、『適正度』はここ数年間の平均は 86%と高く、今回 74%と 12 ポイント減少した。専攻毎で見ると、電子情報系と応用物質工学専攻が 100%に対し、電気系 60%、機械系と建築学専攻 57%と多少ばらつきがみられる。『到達度』は、ここ数年間の平均 75%から今回 61%と 14 ポイント減少した。専攻毎に見ると、電気系が 40%と低い。一方、電子情報系は 83%と高い。本教育目標については、平成 20 年度の平均値に少し減少がみられるが、全般的に見ておおむね適正であると評価できる。

全体として

今回の結果は、平成19年度までのアンケート結果（平均値）と比較すると、低い値となった項目が多かった。『適正度』は70%台の項目が多く、『到達度』は60%台の項目が多かったが、教育目標A-2のように『適正度』『到達度』ともに80%を超えている項目もあった。一方で、A-3のように『適正度』53%、『到達度』41%と両方の項目で、低い値の項目もみられた。さらに、B-1、B-3のように『適正度』は高いが、『到達度』が低い項目もみられた。前者（A-3）については数年前より改善の必要性が指摘されている。今回の結果に対する詳細な検討を行い、改善策を策定・実施を強く希望する。また後者（B-1、B-3）に関しても、『到達度』を上げていくような改善が必要であると思われる。

【E：その他に関する設問】について

○開講されている選択科目の種類についての満足度

前回までは「選択の自由度はどうか」という設問であったが、今回、「(選択の自由度も含めて、)開講されている選択科目の種類に満足できるか」という意味の設問に変更した。結果は、一般科目62%、専門基礎科目73%、工学基礎科目69%、複合的・学際的資質育成科目65%、深い専門性育成科目62%である。低いとは言えないが、もう少し高い評価になるように、カリキュラムを検討する必要があるかもしれない。

○少人数の授業形態

『満足度』の6年間の推移は全専攻としては100, 88, 95, 93, 92, 87%で、今回も90%と高い満足度となっている。系・専攻毎をみても、同様の結果であり、専攻科のメリットの一つである少人数の授業形態は良い評価であることがわかる。

○TOEICに関する支援体制

電子情報系の80%を除けば、他の2専攻2系は20%前後とかなり低い状況である。平成20年度の専攻科2年生では、TOEIC400点をクリアできなかった学生が3名いた。TOEIC400点相当は、専攻科生が修了要件の中で最も気になる(不安を抱く)項目の1つとして認識しているのではないかとと思われる。不安解消も含めて、支援体制の充実が望まれる。

○シラバスは役に立ちましたか

過去6年間の推移は70, 65, 89, 78, 50, 74%であったが、今回44%と激減している。系・専攻別では、電子情報系が80%、機械系が57%、応用物質工学専攻が40%、建築学専攻が29%、電気系が20%である。今回激減した原因を調査する必要があると感じられる。

○教員の時間外での対応について

6年間の推移は全専攻としては100, 100, 95, 96, 88, 91%で、今回79%と減少している。とくに、機械系は43%と半数を切っている。

○学会等での発表は有益でしたか。

発表した学生の『有益』『おおむね有益』との回答を全専攻6年間でみると93, 100, 89, 96, 79, 94% (平均92%)で、今回は81%である。毎年高い結果であるが、前回よりは低くなっている。これ以上減少することのないように留意したいところである。

○ポスターセッションという学校側の企画について、どう思いますか。

『よい』『企画はよいが改善してほしい』と回答した学生の割合の推移を全専攻でみると96, 94, 100, 78, 71, 91% (平均88%)で、今回も89%と、おおむねよい評価である。しかし、これらにうち『企画はよいが改善してほしい』の占める割合は、平成18年度35%、平成19年度38%、今回52%となっている。依然と

してポスターセッションの内容改善を希望する学生がかなりいることがうかがえる。前回の分析同様、ポスターセッションの改善や他の企画についての検討を行っていくことが必要である。

○ポスターセッションを経験して、どうでしたか

『満足度』の推移を全専攻でみると91, 82, 63, 59, 63, 96% (平均76%) で、今回69%である。前回の分析同様、学生の高い『満足度』を維持していくために、前設問の結果も考慮し、継続的な工夫改善を行っていくことが大切である。

○各専攻における特別研究の発表会について

6年間の推移は全専攻としては89, 88, 83, 93, 82, 100% (平均89%) で、今回76%と減少している。電気系及び情報系は100%であるため、他の系・専攻で改善を要する。

○学生相談室を利用したことがありますか

平成18, 19年度について、利用したことが『ある』とした学生数は皆無であり、今回も0名であった。

○学生相談室での対応は、どうでしたか

『よかった』1名、『あまりよくなかった』1名である。しかし、前問では利用したことのある学生数は皆無であったことから、回答学生の回答ミス、または、学生相談室で何らかの対応を受けたが学生相談室を利用したという認識は持っていない学生の回答と思われる。

○進路支援はどうでしたか

今回からの設問である。結果は、『よかった』『おおむねよかった』が78%と、おおむね好評価であるが、もう少し上昇することを期待する。

○学校の事務サービスは、どうでしたか

『満足度』の6年間の推移は91, 100, 63, 85, 100, 86% (平均88%) で、今回も78%で、おおむね良好であるといえる。今後もこの状態を継続していくことを期待する。

○T. A. の経験は、有益でしたか

前回までの設問「T. A. はどうでしたか」を今回変更した。T. A. を経験していない学生25名を除き、経験した学生では、1名を除き、『有益』『おおむね有益』と回答している。良好な状態と言える。

【その他】における今回の結果で特筆すべきは、電子情報系の回答結果が非常に高い評価になったことである。多くの設問で 100%であり、他の専攻や系で低い結果の設問でも、高評価であった。今回の電子情報系の修了生の気質なのか学科での対応の変化なのかは分からないが、後者であるならば、改善策を是非公開してほしい。

【自由意見】

9名（生産情報システム工学専攻の機械系 M : 1, 電気系 E : 2, 電子情報系 I : 2, 物質工学専攻 C : 2, 建築学専攻 A : 2）から意見が寄せられた。それぞれの意見を、①授業についての意見・要望, ②授業以外の意見・要望, ③その他に分類し、以下にまとめた。

① 授業についての意見・要望

(M) 指導教員はちゃんと学生の研究について理解をしておくべきである。

(E, A2 件) 専門性の高い教科が少なく、他学科の科目が多く開講され、専門性を深めることができない。

(E) 断片的すぎる、専門科目が少ない。

(I, A) 創造設計は、前期のものと後期のものを入れ替えてはどうか。研究の追い込みや論文で忙しい中、他学科との連携はとりにくい。

(I) 授業中の私語が多い。

(C) 専攻科で受けた英語はつまらなかったなので、身に付いた気がしない。

(A) 専攻科のカリキュラムやシステムが複雑すぎる。単位修得に関する説明を充実させてほしい。

(A) 授業が多すぎて、研究に集中できない

(A) もっと建築家の作品を学ぶ授業があったらよかった。

(A) TOEIC 対策の授業が少ない。

②授業以外の意見・要望

(A) 球技大会への専攻科の参加は本人の自由にしてほしい。

(A) 専攻科での本科生と同様の縛りをなくしてほしい。

③その他

(C) 学科によって対応が違いすぎる。

(I) 学位授与試験の免除。

(A) 忙し過ぎる。

2.3 新入生保護者アンケート

現在までに実施した新入生保護者アンケートの実施時期、回答者数等は下の通りである。今回の分析は、平成21年度新入生保護者実施分を、前回までと比較して分析した。

	実施時期	対象者数	回答者数	回答率
平成18年度新入生保護者	2006年4月	215名	202名	94%
平成19年度新入生保護者	2007年4月	209名	208名	99.5%
平成20年度新入生保護者	2008年3月	210名	210名	100%
平成21年度新入生保護者	2009年3月	205名	205名	100%

【所属学科】について

平成21年度新入生保護者アンケートに回答した保護者の総数は205名（回答率100%）で、その内訳は、機械工学科41名、電気工学科41名、電子情報工学科42名、物質工学科40名、建築学科41名であった（実際は、電子情報工学科41名、建築学科42名であるため、電子情報工学科の1名分が建築学科に含まれなければならない。）。

なお、回答率は平成19年度99.5%、平成20年度100%であった。

【寮生・通学生の別】について

『自宅通学生』と回答したのは130名（63%）、『寮生』と回答したのは73名（36%）である。過去3年間の『通学生』の数を平成18・19・20年度の順に記すと、143名（71%）・150名（72%）・144名（70%）であり、同様に『寮生』の数は、59名（29%）・59名（27%）・60名（29%）であった。これからわかるように、平成21年度は『寮生』の割合が最も多く、『自宅通学生』の割合が最も少ない。

『下宿・間借りからの通学生』は2名おり、過去2年間にも2～3名いたので、例年、同じような人数の新入生が下宿・間借りをしていることになる。

平成21年度の回答数を学科別にみると、『寮生』は機械工学科が22名（54%）と半数を超え、建築学科が19名（46%）と半数に近く、他の学科に比べて多い。

【通学生の通学方法】について

上記の設定で『自宅通学生』は130名であったが、複数の通学方法をとる学生がいるため当設問の回答の合計は200件である。『公共交通機関』と回答した数は90名（68%）、『自転車』と回答した数は88名（67%）、『徒歩』と回答した数は8名（6%）、『自家用車での送迎』と回答した数は14名（11%）である。

過去3年間の回答数を平成18・19・20年度の順にあげると、『公共交通機関』は84名（59%）、99名（66%）、101名（70%）、『自転車』は2名（50%）、65名（43%）、105名（73%）、『徒歩』は4名（3%）、3名（2%）、9名（6%）であった。従って、平成21年度の回答数は昨年度（20年度）と類似している。

『自家用車での送迎』は平成20年度には14名（10%）であり、平成21年度も同様な数値（14名）である。

【寮生活】について

上記の設問で『寮生』は73名であったが、当設問では71名からの回答があった。最も多い回答は『おおむね心配ない』が29名（41%）で、次に『やや心配』の27名（38%）が多い。『心配ない』と『おおむね心配ない』を合わせた数は38名（54%）、『やや心配』と『心配』を合わせた数が33名（46%）となる。

過去3年間における『やや心配』と『心配がある』を合わせた数を平成18・19・20年度の順にあげると、それぞれの年度の回答数55, 56, 57名に対して、24名（44%）、28名（50%）、29名（51%）であった。これらの数値は平成21年度とそれほど違っておらず、半数の保護者が寮生活に対して何らかの心配事を抱いていることになる。

今回、19名の保護者から具体的な心配の内容を記述していただいた。それらをまとめると以下のとおりとなる。

上下関係や同室者との関係等の人間関係 8件

日常生活（食事・洗濯・朝の起床等） 5件

親元を離れての生活 4件

体調管理 3件

これらの内容は過去3年間と共通しており、親元を初めて離れて生活することに起因するものである。

【有明高専を最初に知ったのは】について

回答数は211件あるので、複数の回答をしていただいた保護者の方がおられる。『以前から知っていた』が140名（68%）と最も多く、次に多いのが『知人（身内、親戚等）』の27名（13%）であるので、『以前から知っていた』が圧倒的に多数を占めている。その他の選択肢は5%以下である。これらの割合は前年度（平成20年度）とほぼ等しい。

『ホームページ』6件、『ポスター・パンフレット等』10件と少ないため、これらの数値を高めて、本校の存在を周知させるような積極的な取組が求められる。

平成21年度の学科別の特色として、『以前から知っていた』については、電子情報工学科が34名（81%）、物質工学科が31名（78%）と、8割を占めており、他の3学科（機械工学科（24名・59%）、電気工学科（25名・61%）、建築学科（26名・63%））の6割前後よりも多いこと、『知人（身内、親戚）』については、機械工学科が9名（22%）で他の学科よりも多いこと、を指摘することができる。

【有明高専受験を決定した時期】について

回答数205名のうち、『中学3年生の1学期頃』が71名（35%）と最も多く、『昨年10月頃』の43名（21%）、『昨年12月頃』の33名（16%）が続く。これら以外では、中学2年生の時（選択肢5～7）は26名（13%）、『中学1年生の頃』は16名（8%）、『それ以前』は13名（6%）である。

昨年度（平成20年度）は、『中学3年生の1学期頃』が55名（26%）、『昨年10月頃』が53名（25%）、『昨年12月頃』が26名（12%）、中学2年生の時が37名（18%）、『中学1年生の頃』が23名（11%）、『それ以前』が9名（4%）であった。

『中学3年生の1学期頃』と『昨年10月頃』を合わせると半数を超えており、8月実施の福岡市・熊本市・佐賀市における学校説明会、本校でのオープンカレッジ、9月の校内見学会が受験決定の参考になっていると考えられる。しかし、8月や9月の行事では『中学3年生の1学期頃』の決定には間に合っていないかもしれない。また、中学3年生よりも前は、平成21年度27%、平成20年度33%で、3割程度もいるため、早い時期から本校の存在を認知させ、本校の魅力を伝える方法をとることが必要であろう。

【進路決定の際、有明高専の情報を何で得ましたか】について

複数回答のため481件の回答があった。『ホームページ』の109名（53%）、『オープンカレッジ』の103名（50%）、

『ポスター・パンフレット等』の83名(40%)、『知人(身内、親戚等)』の70名(34%)が上位を占めている。

前年度(平成20年度)の状況は全472件中、『ホームページ』の102名(49%)、『知人(身内、親戚等)』の80名(38%)、『ポスター・パンフレット等』の71名(34%)、『オープンカレッジ』の62名(30%)、『中学校での学校説明会』が54名(26%)であった。上位にある情報取得手段の項目は類似しているが、『オープンカレッジ』が重要になっていることがわかる。

上記設問の受験を決定した時期において、『昨年10月頃』が20%以上(平成21年度21%、平成20年度25%)と比較的多く、当設問でも『オープンカレッジ』の割合が平成20年度の30%から平成21年度の50%に増加し、オープンカレッジは情報提供の機会として有効に機能していると考えられるので、本校の魅力を伝えるために一層の努力が必要になってくるであろう。また、『ホームページ』は半数を占めているので、今後ともホームページで様々な情報を提供していくことも重要である。

ところで、『中学校での学校説明会』は、平成21年度は32名(17%)であり、前年度の平成20年度(54名・26%)よりも4割程減少している。中学校での学校説明会よりもオープンカレッジが早い時期に開催されているため、その割合が減少しているであろう。

【有明高専入学の決め手】について

複数回答のため479件の回答があった。『お子様本人の希望』の171名(83%)、『就職率が高い』の125名(61%)、『大学へ編入学できる』の62名(30%)、『専攻科へ進学できる』の31名(15%)が上位を占める。また、その他の項目は10%未満である。

前年度(平成20年度)では『お子様本人の希望』が178名(85%)、『就職率が高い』が135名(64%)、『大学へ編入学できる』が62名(30%)、『専攻科へ進学できる』が37名(18%)で、同様な傾向をみることができる。

今回(平成21年度)の『お子様本人の希望』は、全学科とも最も多い回答であり、『就職率が高い』は全学科とも2番目に多い回答であった。ただし、電気工学科では『お子様本人の希望』が他学科よりも少なく、建築学科では『就職率が高い』が他学科に比べて少ない回答であった。『専攻科へ進学できる』は機械工学科(12名)が他学科に比べて多い回答であった。

記述回答は30件あり、多い内容は、本人の希望が11件、高い就職率が7件、本人の適性が5件、良い環境・設備が4件であった。その他は1~2件の少数で、資格が取れる(2件)、高校よりレベルが上(2件)、経済的(1件)、塾の先生の勧め(1件)であった。

【入学後心配なこと】について

「入学後に心配な事がありますか(複数選択可)」との質問に対し、全回答者のうち『ない』の回答割合は平成21年度が15%である。一方、それ以外の方(平成19年度85%、平成20年度82%)は何らかの心配をされていることになり、『学業』『寮生活』『学校生活』『通学』『その他』の総回答数は平成21年度が264件であり、平成19、20年度とほぼ同数であった。このうち、『学業』は116件(57%)、『寮生活』は50件(24%)、『学校生活』は52件(25%)、『通学』は40件(20%)、『その他』は6件(3%)となっており、平成19、20年度とほぼ同様の傾向を示している。

「差し支えなければ内容をお書きください」との問いに対し、平成21年度はともに48名の回答があった。それらの代表的な内容として、①授業についていけるか(留年、退学)、②自主的に勉強できるか、③学業と部活の両立、④人間関係(友人関係、いじめ)、⑤親元を離れての寮生活(集団生活、自己管理、健康管理)、⑥通学時の交通安全、⑦通学時間が長い、等があった。また、近年の状況を反映し、⑧経済的問題(経済状況、研修旅

行の高額出費)が現れている。

【アドミッションポリシーを意識しましたか】について

平成20年度からの設問である。全体で、『意識した』の回答が平成20年度で121名(64%),『意識しなかった』が67名(35.6%)であったが、平成21年度は『意識した』の回答が134名(71%),『意識しなかった』が55名(29%)で、若干『意識した』が増加しており、多くの受験生の保護者がアドミッションポリシーを意識していることが窺える。

また、各学科別に見ると、どの学科も『意識した』が70%程度で、ほぼ同様の割合であり、学科による差異は見られない。

【自由意見】

平成21年度は29名の方から意見が寄せられた。これらの意見をいくつかの項目に分けて整理した。1人で複数の意見を書かれている場合もあるため、合計で29件にはならない。ここ数年は寮生活に関するものが最も多かったが、今回は学校生活にかかる期待が13件(34%)と最も多く、保護者も高専生活に大きな期待をし、学生本人の成長を願う気持ちがうかがえる。次に入試説明会など広報に関するものが6件(16%)挙げられた。入試説明会やオープンカレッジで、好印象をもって頂いた意見が増えてきたことは喜ばしいかぎりであり、今後もこれらの継続的改善が必要である。また、中学校での学生の講話やWebページ、リーフレットなどを通じた情報発信を、今後も充実させることが必要である。続いて、寮生活に関するものが4件(11%)、学習指導面に関する意見や期待が3件(8%)あり、こまめな連絡体制や厳しい生活指導を望む声があげられていた。また、その他として、合否の確認や合格決定後の振り込みについての戸惑いがあげられており、検討すべき事項であろう。

以上、新入生保護者の自由意見を概観すると、充実した学校生活を送り、人間的に成長することを期待しているようである。自由意見の中にもあったが、高専には優秀な能力のある学生が入っているはずであるから、その能力を伸ばすために低学年からきめ細やかな教育を行う必要がある。

以下に、すべての自由意見を大まかな項目毎に列記する。

①寮生活に関するもの[4]

- ・こまめに保護者に連絡がとれる体制がほしい。[2]
- ・1年生から2人部屋にしてはどうか。
- ・部活動で週末も帰省しないようであるが、帰省のために部活を休むことはよくあることか？

②学校生活にかかる期待・不安[13]

- ・しっかり勉強して夢をかなえてほしい
- ・これから5年間、本人が楽しく、まじめに学校生活を送ってほしい
- ・5年間、充実した有意義な学生生活を送ってほしい[3]
- ・有明高専が求める学生を目指して頑張ってもらいたい。
- ・人から指図を受けるのではなく自分から行動を起こさせる人になってもらいたい。[2]
- ・心地よい学校であり、楽しい学校へ通うのを願っている。
- ・5年間の長い期間に挫折するのではないかと不安
- ・人間的にも大きく成長することを期待したい[2]

③学習指導に関する意見・期待[3]

- ・せめて3年間は校則は厳しく指導
- ・一人ひとりの子どもたちのやる気目をさらに伸ばしてほしい。
- ・自転車通学者の高専坂でのスピード出し過ぎが危険

④入試説明会など広報に関すること[6]

- ・説明会など何度も学校へ来て、先生方はやさしく、研究熱心で学生たちは明るく礼儀正しく、素敵な学校だと思った。
- ・オープンキャンパスで物質工学科や機械科の先生方が明るくとても意欲的であった。
- ・オープンキャンパスや入試説明会でいろいろな体験をさせていただきすっかりはまった。
- ・入学説明会は、とても分かりやすく興味深かった
- ・求める学生像に「…国際的に通用し、さまざまな工学の分野に果敢にチャレンジ…」とあるが、実際にどのようなことがなされているのか。様々な情報を発信してほしい。
- ・荒木中には高専の学生が出向いて高専の話をする機会がない（他の高校はある）。是非そういう機会を設けてほしい。

⑤施設・設備に関すること[2]

- ・公共機関が便利になればよい[2]

⑥その他[10]

- ・遠方で、福岡県外であるため、合格発表の確認や、入学料の振り込みで戸惑った。
- ・いつもアンケートをとって、少しでも良い方向へ改善していこうとする貴校の姿勢に頭が下がる
- ・地域に開かれた学校で、街全体で大切にされている学校だと思う。
- ・剣道部で使用する防具類が個人購入か貸与か教えてほしい
- ・よろしく願いいたします[6]

2.4 2年生保護者アンケート

現在までに実施した2年生保護者アンケートの実施時期、回答者数等は下の通りである。今回は、平成21年度の2年生保護者分を、前回までと比較して分析した。

	実施時期	対象者数	回答者数	回答率
平成18年度2年生保護者	2006年7月	207名	176名	85%
平成19年度2年生保護者	2007年8月	215名	167名	78%
平成20年度2年生保護者	2008年9月	224名	197名	88%
平成21年度2年生保護者	2009年9月	206名	182名	88%

【お子様の所属学科】について

回答者は全体で182名であり、2年生全体(206名)の88%にあたる。学科別にみると、機械工学科85%(40名中34名回答)、電気工学科91%(44名中40名回答)、電子情報工学科90%(40名中36名回答)、物質工学科90%(42名中38名回答)、建築学科85%(40名中34名回答)となっている。

【寮生・通学生の別】について

全回答数182名の内訳は、『自宅通学生』が130名(71%)、『寮生』が50名(27%)である。『寮生』の総数は平成20年度50名(26%)と同じである。各学科の『寮生』の割合は、機械工学科35%(12名)、電気工学科23%(9名)、電子情報工学科25%(9名)、物質工学科29%(11名)、建築学科26%(9名)となっており、学科間での人数のばらつきはほとんどない。また、『その他の通学生(下宿等)』との回答は、電子情報工学科の2名(1%)だけであった。

【(通学生の保護者のみ) お子様の通学方法】について

複数回答可であるため、回答数169は、前設問で『自宅通学生』と回答した130名よりも多い。内訳は、『徒歩』が4名(2%)、『公共交通機関』が52名(31%)、『自転車』が50名(30%)、『バイク』が55名(33%)、『その他(自家用車送迎)』が8名(5%)であった。

【(通学生の保護者のみ) 通学方法についてどのように思われますか】について

平成20年度から記述式となった設問で、本年度は14名(昨年度は24名)からご意見が寄せられた。最も多かった内容としては、バイク通学に関する事で、通学時の事故が心配[4件]、バイク通学の制限緩和の要望(排気量の緩和[4件]、距離の緩和[1件])等であった。また、バスの本数の増便[2件]やスクールバス運行[1件]の要望があった。これらは毎年寄せられている内容(要望)であり、学校としての見解を保護者の方に伝える必要があるだろう。

【(寮生の保護者のみ) 寮生活についてどのように思われますか】について

平成20年度から記述式となった設問で、本年度は23名(昨年度は14名)からご意見が寄せられた。それらの中でも寮の食事に関する意見要望は多く、食事の内容についての不満[4件]、食事時間についての要望[3件]などがあった。一方で、「食事が前よりも良くなったようで、安心です」との意見もみられた。食事に関しては毎年多くの意見や要望が寄せられていることもあり、それらについては十分に調査し、対応する必要があると思

われる。

その他の意見として、目が届かなくて心配[3件]、特に問題なし[4件]、寮に対する感謝[2件]、夜の見回りを強化してほしい[2件]、良いことと悪いことが半々[1件]、「廊下や階段の清掃が行き届いていない感じがする」[1件]、男子寮の入室に際して、母親も入室が禁止されているが、保護者に関しては、許可してほしい[1件]などがあった。

【有明高専に入学させて】について

当設問に対する回答数は、【所属学科】の回答数182名より7名少ない175名であった。『非常によかった』は55名(31%)、『よかった』は108名(61%)、『やや後悔』は12名(7%)、『後悔している』は0名(0%)である。『非常によかった』と『よかった』を合わせた値は92%で、平成20年度の89%より若干高い。また、『やや後悔』『後悔している』を合わせた値(7%)は、平成20年度(11%)よりも減少した。

各学科の『非常によかった』『よかった』の割合は、機械工学科97%、電気工学科95%、電子情報工学科91%、物質工学科94%、建築学科88%となっている。一方、『やや後悔』と回答した人数は、建築学科の4名が最も多く、電子情報工学科3名、電気工学科2名、物質工学科2名、機械工学科1名であった。

記述式には、平成20年度(50名)とほぼ同程度の49名からの意見があった。多くが『非常によかった』『よかった』に関わる肯定的なものである。意見の多い順に、楽しい生活・充実した生活をおくっている[18件]、自由な校風[12件]、自主性や自立心、向上心の萌芽[10件]、充実した専門教育や施設設備に対する満足感[5件]、良好な友達関係の構築[1件]などである。一方、『よかった』と回答しつつも、勉強・学習面でついていくことへの不安を感じているとの意見[4件]もあった。

次に、『やや後悔』に関する意見として、勉強・学習面での不安[5件]が多く、家が遠いこと(そのため目が行き届かない)[2件]が挙げられている。

本年度は『後悔』が0名であったが、『やや後悔』の回答が12名(7%)あった。昨年度の報告書で記された「9割の保護者の方が肯定的にみている反面、1割がそうでないという状況は毎年続いており、似たような意見が寄せられている」という文章は、残念ながら本年度にもあてはまる。『やや後悔』や『後悔』とする回答をゼロに近づけるために、学校全体で出来る限りの取り組みが必要であるだろう。

【有明高専の学習指導のあり方】について

当設問に対する回答数は、【所属学科】の回答数178名より8名少ない170名であった。

『満足』は56名(32%)、『おおむね満足』は106名(61%)、『やや不満』は12名(7%)、『不満』は0名(0%)である。『満足』と『おおむね満足』を合わせた値は162名(94%)で、本校の学習指導のあり方は、多くの保護者から支持されていることがわかる。

各学科の『満足』『おおむね満足』の割合は、機械工学科91%、電気工学科92%、電子情報工学科94%、物質工学科91%、建築学科97%となっている。一方、『やや不満』と回答した人数は、機械工学科・電気工学科および物質工学科の各3名が最も多く、電子情報工学科が2名、建築学科1名であった。

記述式には、平成20年度(19名)と同数の19名からの意見が寄せられた。

『満足』とした意見には、「自主的に勉強している」、「勉強する雰囲気の中で生活させていただいて、ありがたい」、「やる気が出やすい」と前設問の記述式でもみられた「自主性や自立心、向上心の萌芽」に関連する理由が述べられている。『おおむね満足』では「遅れがちな生徒にたいしても、目を配ってほしい」、「勉強に対する意欲がないので、どうすれば意欲をもつようになるのか」、「勉強の仕方を教えてほしい」、「専門科目になると難しくなり、理解に苦労している時がある」等、『おおむね満足』との回答とは矛盾する内容の意見が多くみられ

た。『やや不満』では、厳しい指導、個人指導、強制的な補習、補講、内容をまとめたプリント等で勉強をしやすいしてほしい等、具体的な意見がみられた。また、教員に対する意見として、ついていけない子をどうにかしようという熱意があまり感じられない[1件]、教え方などのレベルアップを望む意見[1件]、生徒の質問に対する対応への不満[1件]などもあった。

記述式から、基本的には『おおむね満足』と回答しつつも、学習面での不安や要望を示す内容が多くみられる。勉強に対して「興味がわからない」、「初めにどうすればよいか分からない」ために、滞っている子どもをほんの少し導いてあげること（ちょっとした後押し）で、自ずと「自主性」、「自立心」、「向上心」が芽生えて、その後は自分で前進するようになる、と期待している保護者が、不安を示す意見を記述しつつも『おおむね満足』と回答したのではないかと推測した。

これら『おおむね満足』、『やや不満』とした保護者の意見・要望を、我々は真摯に受け止め、これからも常により良い学習指導のあり方を考え、改善していく姿勢を持ち続ける必要がある。

【有明高専の学生への生活指導】について

当設問に対する回答数は、【所属学科】の回答数 182 名より 4 名少ない 178 名であった。

『満足』と『おおむね満足』を合わせた値は 5 学科全体で 160 名(90%)であり、平成 20 年度(84%)からは少し増加している。一方『やや不満』は 18 名(10%)、『不満』は 0 名(0%)である。

各学科の『満足』『おおむね満足』の割合は、機械工学科 94%、電気工学科 87%、電子情報工学科 91%、物質工学科 83%、建築学科 94%となっている。一方、『やや不満』と回答した人数は、物質工学科の 6 名が最も多く、電気工学科 5 名、電子情報工学科 3 名、機械工学科 2 名、建築学科 2 名であった。

記述された意見は 20 件あり、少数意見として、厳しすぎずゆるすぎずでいいと思う[1件]、以前よりも厳しくなった[1件]、他高専に比べ生活指導関係の話が多いので驚いている[1件]というものがあったが、ほとんどは、制服の乱れや茶髪ピアスについてもっと厳しく指導してほしいとの意見であった。

中には、「これから先、部活等での飲酒の強要がないか心配」、「授業参観に来て少々驚きました。(中略)服装の乱れと授業中の教室の何か散らかった感じが残念でした」という意見もあった。

【制服】について

平成 20 年度より記述式の設問となり、72 名の回答をいただいた。そのうち、「今のままでよい」が 56 名(79%)、「なくしても良い」が 6 名(8%)であり、平成 18・19 年度と同様、現在のままの制服に賛成が高い割合を占めた。今のままでよいという理由として、「一般の高校と同じように」「学生らしい」「経済的」「服装の乱れ防止」などが挙げられていた。学科別では、『私服がよい』の回答は建築学科がほとんど(4名/6名中)であった。その他の記述を以下に示す。

- ・きちんと着てほしい・厳しく指導してほしい(5名)
- ・制服の変更(ブレザー、ジャンパースカート各1名)
- ・女子の夏服は透けすぎる
- ・夏のブラウスと冬のベストを着ないのもったいない
- ・冬服の下のカッターシャツが出ない長さだとすっきりする
- ・中学と一緒にするのは助かるが3年まで持たないので1年か2年まででよい

なお、来年度より学生の要望を受け、制服のデザインが変更されることが決定している

【お子様の課外活動（部活動）のあり方】について

回答数は162で、20名が未回答である。まず、『所属していない』の回答は、機械工学科では16%、電気工学科17%、電子情報工学科21%、物質工学科19%、建築学科10%、総平均では17%であり、83%ほどの多くの学生がなんらかの部に所属していることがわかる。昨年、一昨年度計でも80%が何らかの部に所属しており、部活動に参加する学生の割合は高いと言える。次に、部に所属している学生の保護者の『満足度』の割合は、93%と非常に高く、昨年、一昨年度の平均と同様であった。記述意見においては、「試験前に練習・試合が多い」(2件)、「指導者をつけてほしい」(2件)、「もう少し活発化・厳しく」(2件)などの意見があった。部活によっては、保護者へ通信を出しているところもあり、「様子がよく分かる」(2件)と好評であるものもあった。

【高専祭のあり方】について

『みたことがない』との回答は全体の21%であり、思いの他多くの方にご覧いただいている。ご覧になった方の『満足度』は全体で93%と高く、学科毎にみても最も低い電子情報工学科でも82%もある。したがって、高専祭のあり方には問題がないと考えて差し支えないだろう。

10件の記述回答の中の「頑張っている」や「生き生きとした姿に好感が持てた」という肯定的な意見や、「次回はぜひみたい」(3件)という期待からも首肯されよう。その他として、「もっと積極的に、全体が取り組めるようにすれば、もっと、盛り上がると思います」という意見も挙げられた。

【有明高専のホームページ】について

本校のホームページをみたことがあるかどうかの設問は平成19年度から始めたものである。全体における『よく見ている』は12件で、『ときどき』の69件を合わせても81件となり、これは全体の47%で、平成19年度の34%から12ポイント増加しており、その一方、『見たことがない』は39件(23%)で平成19年度の46%から半減している。この傾向は学科毎にみても同様である。ホームページによる情報発信が大きな役割を果たしつつあることが分かる。また、『見ることができる環境がない』は7件(4%)しかない。

記述回答は8件あり、「楽しみに見ている」という期待や、「ねじ男（機械工学科のキャラクター）のファン」という声もある一方、「更新が少ない（寮も含む）」(5件)、「トップページが重たい」、「見にくい」という改善要望もあった。

今後ホームページによる情報発信の重要性はますます高くなることが予想され、より多くの保護者に認知されるような広報活動および保護者にとって有益な内容づくりに心掛けることが必要であろう。

【保護者と学校との連携】について

全体における『満足』と『おおむね満足』を合わせた『満足度』は平成20年度82%、平成21年度93%と高く、保護者と学校との連携は保護者から理解されていると判断される。学科別に『満足度』をみると、物質工学科の97%が最も高く、最も低い電気工学科でも83%もある。

記述回答14件は『おおむね満足』あるいは『やや不満』の回答者からのものであるが、およそ半数が、「一方通行である」、「情報が不足している」、「もっと密であってほしい」、「子どもが資料を見せない」など、保護者との接点が少なく、そのため子供の様子や学校の状況が把握できないという指摘である。

保護者と学校との連携を強いものにするには、学校に対する保護者からの信頼感の強化に繋がるだろう。今

年度より実施した授業参観もその試みの一つである。今後とも、このような保護者との連絡を増やす試みを積極的に行う必要がある。

【自由意見】

平成 21 年度は、30 名の方から自由意見を記述していただいた。特に、今年度より始めた授業参観・学級懇談会についてのものが多く、「とても良かった。今後も続けてほしい」(4 件)、「できれば土日にやってほしい」(2 件)、「回数をもっと増やしてほしい」(3 件)などが挙がっている。

その他の自由意見の内容を分類して列記する。

- ① 学校運営に関すること
 - ・混合学級はいいと思う (5 件)
 - ・混合学級になったとき友達づくりに力が入り、勉強に集中しない (1 件)
 - ・混合学級だと、科ごとの連絡が取りにくい
 - ・クラスでのボランティア、小学校への出張実験など、知識をいろいろなところへ届けていく時間を作るともっと成長するのではないか。
 - ・課外授業の検討はないのか
 - ・通知表はないのか
 - ・女子の夏服は変更すべき
- ② 学生指導に関するもの
 - ・わかりにくい授業については改善してもらいたい。
 - ・具体的な将来の仕事内容などもっと詳しく知る機会が多いとよい。
- ③ 寮生活に関するもの
 - ・寮生活のため、様子が分からない。(2 件)
 - ・規則を守らないときは連絡してほしい。
 - ・自分の生活スタイルに、勉強する時間を、必ず確保することに、少しルーズになっており、人に流されることなく、きっちりと取り組んでほしい。
- ④ その他
 - ・授業のための教科書などが重く自転車では危険であるため、ロッカーを重視してほしい。
 - ・自宅が遠いため、授業参観等行事に参加できないのが残念。
 - ・子供が楽しく登校しており安心している。
 - ・上学年では勉強が難しくなるので心配である。
 - ・いろいろな地区の友達が増え、子どもにとって世界が広がった。
 - ・もう少し、本人が、勉強に対してやる気を出すといいのと思う。
 - ・部活での製氷機をもう 1 台設置してほしい。

平成 21 年度より開始された授業参観・学級懇談会には多くの意見が寄せられた。好評であり、今後も実施方法について検討しながら継続するべきである。また、その他の意見についても学校に対する建設的な意見が多く、これらの事項に関して、学校として、真剣に検討・改善を行う必要がある。

2.5 4年次編入生アンケート

現在までに実施した4年次編入生アンケートの実施時期、回答者数等は下の通りである。今回は、平成21年度編入生分を分析した。

	実施時期	対象者数	回答者数	回答率
平成19年度4年次編入生	2007年4月	11名	11名	100%
平成20年度4年次編入生	2008年4月	10名	10名	100%
平成21年度4年次編入生	2009年4月	7名	7名	100%

【所属学科】

平成21年度編入学生7名全員からの回答があり、その内訳は、機械工学科・電気工学科・電子情報工学科・物質工学科がそれぞれ1名、建築学科が3名である。

なお、編入学生の数は、平成18年度17名、平成19年度11名、平成20年度10名であり、減少傾向にある。

【寮生・通学生の別】

平成21年度の編入学生7名全員寮生である。平成20年度も10名全員寮生であり、平成19年度は11名中2名が自宅通学生であった。このように殆どの編入学生が寮に入っており、遠方からの学生が多いことを示している。逆に近郊の工業高校からの編入学生が少ないことも意味している。

【(通学生のみ) 通学方法】【通学方法について】

平成21年度、通学生がいないため回答はなかった。

平成19年度に2名の自宅通学生がおり、『自転車』2件、『公共交通機関』1件という回答であった。このうちの1名は『自転車』と『公共交通機関』という複数の方法で通学している。また、この2名は通学方法について『問題ない(1件)』、『おおむね問題ない(1件)』と回答している。

【(寮生者のみ) 寮生活について】

平成21年度、『心配ない』が1名、『おおむね心配ない』が3名、『やや心配』が3名であった。半数が『やや心配』であったが、具体的な記述はない。

平成20年度は『心配ない』と『おおむね心配ない』で100%であった。アンケートの実施は、平成20年度が入学式後2、3週間後に、今年度が入学式後、1、2週間後に行っており、この期間に差があるため、今年度、半数が『やや心配』としていると回答したと考えられる。

なお、平成19年度は入寮以前にアンケートを行ったため『やや心配』と『心配がある』を合わせた数が6名(67%)と多かった。

【有明高専の存在を最初に何で知りましたか】

平成21年度、7件の回答があり、『高校の先生』が5名(71%)と圧倒的に多い。その他は、『以前から知っていた』と『ホームページ』がそれぞれ1名である。過去2年間においても『高校の先生』が圧倒的に多く(平成19年度8名・73%、平成20年度8名・80%)、本校における高校の先生方への説明会が一層重要になってくるであろう。

なお、平成20年度には『高校における学校説明会』が1名いたが、今回はいなかった。高校での説明会等の

機会も積極的に活用して編入学生を確保できるように努めていかなければならないであろう。

【有明高専受験を決定した時期】

平成21年度は、『昨年5月頃』が3名(43%)、『昨年4月頃』が1名(14%)で、高校3年生になってからの決定が半数を超える。その他は『高校2年3学期頃』が2名(19%)、『高校2年2学期頃』が1名(14%)である。過去2年間においては、『昨年4月頃』と『昨年5月頃』を合わせた数が、平成19年度7名(64%)と平成20年度は5名(50%)で、この時期に半数以上が進路決定をすることがわかる。『高校2年3学期頃』もいずれの年度も3割程度いる。従って、高校2年の3学期頃から高校3年5月頃の5ヶ月間に8~9割が受験を決定しているので、この時期までに本校の存在を高校生へ示すことが重要となり、また、高校の先生に対する説明会がこれらに対応できるよう、検討を行うことも必要であろう。

【進路決定の際の有明高専の情報の取得方法】

平成21年度は15件の回答があり、『ホームページ』と『高校の先生』が6名(86%)、『ポスター・パンフレット』が2名(29%)であった。平成19・20年度とも『ホームページ』『ポスター・パンフレット等』『高校の先生』がほぼ同じ割合であったので、平成21年度は『ポスター・パンフレット等』が少ない結果となっている。また、平成19・20年度とも『知人』が3割程度、平成20年度では『高校における学校説明会』も3割いたが、これらは平成21年度にはいなかった。

なお、平成21年度にはこれまでいなかった『オープンカレッジ』が1名おり、また、その他として「インターネット掲示板等」という記述回答があった。

ところで、上記の設問【有明高専の存在を最初に何で知りましたか】でも『高校における学校説明会』が今年度はおらず、当該設問と連動している。高校での説明会は、高校側からの要請で行っているのであろうが、本校から説明会への積極的な参加を行うことを検討することも必要であろう。

【有明高専入学の決め手】

平成21年度は21件の回答があり、『就職率が高い』が5件、『学生教育がしっかりしている』が4件、経済性が3件で、その他は2件以下であった。その内、『大学に編入できる』が2件、『専攻科へ進学できる』が1件で、進学は3件(43%)となる。

平成19・20年度とも『就職率が高い』と『学生教育がしっかりしている』が多く、平成21年度と同様な結果であった。但し、進学(大学の編入と専攻科への進学)は平成19年度が7件(64%)、平成20年度が10件(100%)だったので、今年度の回答数は少ない。

記述回答は2件あり、2件とも専門性をあげており、1件の記述には経済性も併記されている。これらの意見は平成19・20年度にもみられるものである。

【入学後の心配】

平成21年度は10件の回答があり、『学業』が5件(71%)と多く、『寮生活』と『学校生活』がそれぞれ2件(29%)であった。

『学業』に対する心配は、平成19・20年度にはそれぞれ11件と10件あり、全員が心配事として回答していたので、平成21年度では2名が挙げていない。また、両年度とも4割が『学校生活』に対して心配事としてあげているので、平成21年度は若干少ない。このように平成21年度は、平成19・20年度とは異なる傾向があり、このことは心配事が『ない』と1名が回答していることから首肯できよう。

なお、記述回答はなかった。

【アドミッションポリシーに対する意識】

平成 21 年度、『意識した』は 5 名（71%）、『意識しなかった』は 2 名（29%）であった。

平成 20 年度では『意識した』が 8 名（80%）、『意識しなかった』が 2 名（20%）であり、編入学生の大多数がアドミッションポリシーを意識していたことがわかる。また、2～3 割が意識していないことも事実であり、募集要項や高校の先生への説明において意識するように働きかけることが求められる。

【高専卒業後の進路について】

平成 21 年度、『就職』が 4 名（57%）、『専攻科進学』が 2 名（29%）、『その他』が 1 名であり、『大学編入学』と『考えていない』の回答はない。

上記の【有明高専入学の決め手】では『大学に編入できる』が 2 名、『専攻科へ進学できる』が 1 名であったが、当設問とは異なる結果となる。本校への編入学を決めた時から実際に編入学をした時点まで、1 年程経過しており、その間に進路に対する考えに変化が生じたのであろう。

平成 20 年度は『就職』が 3 名、進学が 3 名（『専攻科進学』1 名、『大学編入学』2 名）で、『考えていない』も 2 名いた。

【有明高専への要望】

記述式の回答はなかった。

【自由意見】

記述式の回答はなかった。

他の設問も含め、記述式の回答は過去 2 年間に比べて少ない。アンケートの方法に工夫が必要なのか、編入学生個人の気質なのか、判然としないが、記述をするように促すことは必要であろう。

3. あとがき

本委員会が本校の教育プログラムの継続的改善に資するために行ってきたアンケートの実施・分析・報告活動は今年で足掛け8年目になります。6回目として提出する今回の本調査報告書は、平成21年2月から9月までの実施分を前回までと比較して分析したものです。

今回の分析の結果、継続的改善という観点からは、本校の教育システムは、全体的には良好の状態であると思われます。しかし、改善あるいは検討を要する事項が依然として存在することも事実です。とくに、今回、卒業時・修了時アンケート結果では、評価が減少した学科では、その原因の調査が必要であるとおもわれます。また、新入生および2年生保護者アンケートの記述欄では、評価をいただいたものもありますが、例年通り、学校として検討を要する貴重な意見も寄せられています。

「まえがき」で上述したように、本調査報告書は、学校の継続的改善に資することを目的にしています。本報告書が各部署において改善に利用されることを切に希望する次第です。そのためには、まず、本校の教職員各人が、本調査報告書における関係箇所を一読し、本校に対する学内外からの評価を認識することが必要であり、責務でもあると思います。そして、関係各所で共通認識に基づく改善等の検討がなされることを切に願う次第です。

なお、平成21年9月現在、OB（卒業生）および企業に対してのアンケートを発送し、回答を待っている状況です。これらの集計・分析は、次回の調査報告書で取り上げる予定です。

最後に、アンケートにご協力いただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

学校運営検討委員会

委員長 坂西 文俊（一般教育科）

坪根 弘明（機械工学科）

河野 晋（電気工学科）

嘉藤 学（電子情報工学科）

田中 康徳（物質工学科）

松岡 高弘（建築学科）

（事務担当 原賀 亮治（総務課企画室））

